

大学礼拝
説教集

第 19 号



2015

東北学院大学

表紙の絵について

この絵は、東二番丁にあった東北学院中学校・高等学校の昭和30年代ころの様子を、当時の美術教師であった小山喜三郎画伯（元宮城県芸術協会理事長）に直接お願いして制作していただいたものです。

描かれている校舎は、1919年3月の仙台大火で全焼した東北学院東二番丁普通科校舎にかわり、第2代シュネーダ院長が心血をそそいで1922年に建築した赤レンガの校舎です。この正面入口の真上に建学の精神をあらわす「LIFE LIGHT LOVE」が刻まれました。太平洋戦争末期の1945年7月10日の仙台大空襲で内部が全焼しましたが、外壁が残ったのを修復して長期間使用されました。私もここで6年間学びました。絵の中央にみえる大きな木は「さいかちの木」です。グラウンドの中央にあってサッカーなどの邪魔になりましたが、生徒たちに愛されていました。1959年秋の伊勢湾台風によってこの老木は倒壊してしまいました。この絵の持つ東二番丁校舎の雰囲気は多くの学院ボーイの郷愁を誘うことでしょう。2004年に私が学長に就任してすぐに依頼し、旧美術部員らの協力を得て、小山喜三郎画伯が14か月をかけて制作してくださいました。8年間は学長室に、そして現在は院長室に飾っています。2014年10月に正式に学校法人東北学院に寄贈しました。

（院長 星宮 望）

大学礼拝

説教集

第 19 号

2015

東北学院大学

目次

巻頭言	宗 教 部 長	佐々木 哲夫	4
十字架のことば	理事長・学長	松本 宣郎	6
後世への最大遺物（内村鑑三）	院 長	星 宮 望	13
永遠なるもの	仙台広瀬河畔教会	望 月 修	18
神の業が現れるために	宮城野愛泉教会	橋 爪 忠 夫	24
沈黙の時	仙台五橋教会	宮 川 経 宣	29
仕える人になりなさい	塩釜キリスト教会	山 田 崇 浩	35
思い悩み	東北学院中学校・高等学校 宗 教 主 任	松 井 浩 樹	41
LIFE, LIGHT AND LOVE FOR THE WORLD	東北学院榴ヶ岡高校 宗 教 主 任	西 間 木 順	47
命は人間を照らし出す光	宗 教 部 長	佐々木 哲夫	53
天からの恵み、地に満ちて	大学宗教主任	野 村 信	58
説教「希望の源」	大学宗教主任	原 口 尚 彰	63

考え直して信じる人生	大学宗教主任	出村 みや子	69
悔いることを感謝する	大学宗教主任	村上 みか	75
〈喜び〉を探し求めること	大学宗教主任	原田 浩司	81
小さな群れ	総合人文学科長	北 博	86
The Good Samaritan	文学部教授	マーチー デイビッド	94
徴税人ザアカイ	経営学部教授	松村 尚彦	95
一枝のぶどう	工学部教授	星宮 務	100
ただ一つ知っていること	工学部准教授	長島 慎二	105
ある日の音楽礼拝	大学オルガニスト	今井 奈緒子	110
聖書に見る偉い人とはどういう人か？	教養学部准教授	大澤 史伸	118
The load on our shoulders	教養学部教授	ゾンダーマンフリーダー	128
ステンドグラスに描かれたキリスト	総務部長	日野 哲	129
編集後記	大学宗教主任	原田 浩司	134

巻頭言 「生き方」

宗 教 部 長 佐々木 哲 夫

4 「イエスはお答えになった。『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る』一つ一つの言葉で生きる」と書いてある。」

(マタイによる福音書 四章四節)

右の聖書箇所は、イエス・キリストがサタンに対して応答している場面です。よく見ると「…と書いてある」とあります。旧約聖書を引用しているのです。サタンは、直後の場面で、旧約聖書の言葉を引用して語りかけます。両者とも、旧約聖書を熟知し、旧約聖書を前提にしているのです。(マタイ四章一〜十一節)。

ところで、パンか神の言葉かという問題になると、「衣食足りて礼節を知る」のように、パンを優先する理解があります。また、生き甲斐ということを考慮し、特に「パンだけ」の「だけ」とい

う部分否定の表現に着目し、パンと神の言葉の両方が同等に重要であるとする理解もあります。では、イエス・キリストとサタンは、当該箇所をどのように理解していたでしょうか。私たちも、引用箇所の申命記八章を参照しつつ考えたいと思います。

出エジプトにおける荒野での出来事でした。空腹になったイスラエルの民が、奴隷として生活していたエジプトの肉鍋とパンを懐かしんでモーセに不満をぶつけたのです。それに応じた神は、朝にマナを、夕にウズラを与え、彼らが食するパンと肉としたのです。その時に語られた言葉が『人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる』(申命記八章三節)でした。意外なことに、この言葉は、空腹を癒された人々に語られたのです。食べて満たされていた民に、優先すべきは、パンではなく神の言葉であることを体験的に知らせたのです。

後に、イエス・キリストは、同じことを自分の言葉で弟子たちに語っています。「何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。・・・あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」(六章三二～三三節)。神の言葉で生きるとは、空腹になることではなく、必要なものを与えてくれる神に信頼して生きる生き方なのです。

この『説教集』が、神の言葉に養われるものとして用いられることを祈念している次第です。

「十字架のことば」

理事長・学長 松本宣郎

コリントの信徒への手紙Ⅰ 第二章一八～二五節

18 十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。19 それは、こう書いてあるからです。

「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、

賢い者の賢さを意味のないものにする。」

20 知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。21 世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっています。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになりました。22 ユダヤ人はしるしを求め、ギリシア人は知恵を探しますが、23 わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えていきます。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、24 ユダヤ人であ

ろうがギリシア人じんであろうが、召めされた者ものには、神かみの力ちから、神かみの知恵ちえであるキリストを宣のべ
伝つたえているのです。神かみの愚おろかさは人ひとよりも賢かしこく、神かみの弱よわさは人ひとよりも強つよいからです。

時間というものはそれ自体見たりつかんだりできませんが、「未来はあなたの前にあると思いま
すか、それとも後ろにあると思いますか？」と尋ねられたら、皆さんはどう答えるでしょうか。
一般に人は、未来は自分の目の前にある、という認識をもつのではないかと思えます。

高村光太郎といえば詩集「智恵子抄」などで知られる詩人です。智恵子が福島の生まれであつ
たことから、私たちも親しみをもつ詩人といつてよいと思えます。彼の「道程」という詩も有名
です。私たちの世代は中学高校の時代に必ず教科書などで読まれたものです。私の中学生時代
には「生徒手帳」に掲げられていました。今でも記憶しています。

僕の前に道はない

僕の後ろに道は出来る

ああ、自然よ 父よ・・・

ここで「僕」は未来を自ら切り開く覚悟で歩み出そうとするのですが、まだ白紙、あるいは未

踏の未来は、「目の前」にあるように見えます。そしてこれまでの彼の人生、つまり歩いて来て踏んだ跡が道にたとえられ、それは後ろにある、というのです。要するに、過去は「後ろ」にあると意識されているのです。

このような感覚が普通なのだろう、と思われれます。

しかし、未来と過去を指す言葉を探してみると、案外なことに気づかされます。今日が三月五日だとして、先立つ三月二日のことを、私たちは「今日から三日前」というのが通例でしょう。つまり「過去は前にある」のです。逆に未来に当たる三月一〇日については「五日後」と言わないでしょうか。間違いなくそう言うはずです。「未来は後ろにある」のです。英語も同様です。三日過去は、*three days before*（です）、七日未来は*seven days later* となります。*later* は「遅く」ですから、遅れる、つまり後ろから追う、ということになるわけです。フランス語、ドイツ語も、またそれらの祖先となるギリシア語、ラテン語も同様なのです。

現代人にとって常識とすら思える、未来と過去の空間上の位置観念と、言語表現は食い違っていることです。このことを示唆してくれたのは私の友人でもある旧約学者月本昭男氏ですが、彼によるとアフリカのさる人々の伝承に、未来を自身の後ろに置くという観念が明瞭に見られるそうです。彼らの伝承はかなり古い時代にさかのぼるようです。今生きているこれらアフリカ人は、

未来は前にあるのではないか、というヨーロッパ人に、「未来は後ろにある。だって私たちは未来を見ることが出来ないではないか、目の前に見えるのは過去だけだ」、と答えるのです。

このように見ると、私たちの祖先は、言語を形成した太古の時代には過去を前、未来を後ろ、と言う風に観念していた、と想像してよいのではないか、と思われてきます。それがある時点で逆転してしまったということになります。先の月本氏とこのことについて語らったとき、少なくとも聖書の観念上で、未来は人の前にある、逆転させたのは実は聖書だったのかもしれない、などと言い合ったことでした。

パウロもそうなのです。彼は人生を競走にたとえます。「フィリピ」三・二三、一四には「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。」とあります。この未来観は高村光太郎のそれと同じです。

しかし、確かにアフリカの伝承にも一理があるように思われます。私たちは背中を未来に向けて生きている、後ろに未来があるから見えない。過去のことなら目の前であって、よく見ることが出来る。だから、過去をよくよく見ることによって、見えない背中のことも予測がつく、怖くなくなる、というとらえ方が出来るかも知れません。

ともあれ、今日はじっくりと過去を見つめ、見えなくて不安な未来へもしつかりと進んでゆくよすがを得たいと思います。

最初のキリスト教徒は周囲の人々の目につまずきであり、愚かと思えるものをのべ伝えた、ということです。それは、ユダヤ人が拒み、排除したナザレのイエスが神の子、救い主キリストであった、というメッセージでした。そのキリストは神の子であって、しかも人間として生き、十字架で死んだが復活した、というメッセージは、アテネ人を代表とするギリシア人には愚かなこと、と映ったのでした。

パウロは、広くギリシア人たち異邦人に福音を伝えたこともあつてか、とくに「十字架の言葉」が、非キリスト教徒から見ての「愚かさ」の焦点であつた、と強調するように見えます。これは古代世界でもっとも洗練された文化を誇つていたギリシア人にとって、確かに価値の逆転であつたのです。

佐藤研という新約学者は、そもそもパウロのキリスト教回心の原点が、むごたらしい刑罰であつた十字架刑に処せられたイエスが、死んで復活したという事実にあつた、と言ひ、そうである以上「十字架」という、現代人にとつてもはや忌まわしさを感じさせず、むしろ清らかさ、尊さを

象徴する響きの言葉では不十分で、忌まわしさを明瞭に示す「杭殺柱」という訳語を提唱します。そのようなおどろおどろしい刑で死んだ、にもかかわらず、彼は復活し神の子であることを証明した、それを宣教することこそが愚かさの究極だ、というわけです。

彼自身が愚かさに一度はつまずき、しかしキリストの啓示によって、その愚かさが最高の価値となるという経験をしました。だからこそパウロの説教は、キリスト教の伝播において大きな力をもったのです。

以来二千年、この「愚かな」「十字架の言葉」が語られ、キリスト教は広がってゆきました。パウロから一八〇〇年を経て、アメリカから日本に来訪した宣教師たちもまた、この言葉を語ったのです。W・ホーイが語り、D・シュネーダーが語った「十字架の言葉」を知り、信じた押川方義もしかり、でした。彼らの「愚かさ」が仙台神学校の基盤となり、東北学院の建学の精神となつていったのです。

日本人の中にもアテネ人のように、キリスト教を愚かそのものと決めつける者がありました。日本キリスト教史において有名な、政府の「訓令一二号」はその一例であり、キリスト教を教育課程に入れる学校は公認しない、と定めたのです。しかしそれ以後も、キリスト教会とキリスト教学校とは、この「愚かさ」に固着し、福音を神の力、神の知恵として伝え、教え続けてきたの

です。その歴史の中に東北学院の二二八年も縫い込まれています。

これからの私たち、未来は、将来は背中にあり、見通すことは全く出来ないとしても、目の前にあつて遙かに向こう、つまり遠い過去までも知ることは出来ます。そこから私たちは「愚かな」「十字架の言葉」を伝え、教えることは正しいことであつた、と確信できるでしょう。それは今の日本に、小さく、弱さを拭えないとしても、現に礼拝を行い、聖書を教える教会とキリスト教学校とが厳然として存在し、存続しているという一事をもつてして明らかだと思つたのです。恐れずに、後ろ向きでも、未来に向かつて確かな足取りで歩めるというものです。そう私は信じています。

祈り：：私たちの主、イエス・キリストの父なる神さま、まるで後ろ向きで歩いているかのように行く先を見失いがちで、よろめいている私たちです。けれど、私たちが知っている、今このときに至るまでのあなたの恵みによって積み重ねられた歴史から、私たちが担っているキリスト教学校のわがが正しいことであつたと悟らせ、確信を持つて未来へと歩ませてください。聖霊の導きをお与えください。主の御名によって祈ります。

「後世への最大遺物（内村鑑三）」

院長 星宮 望

マタイによる福音書 五章十三〜十六節

13 「あなたがたは地の塩である。だが、塩に塩気がなくなれば、その塩は何によつて塩味が付けられよう。もはや、何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけである。14 あなたがたは世の光である。山の上にある町は、隠れることができぬ。15 また、ともし火をともして升の下に置く者はいない。燭台の上におく。そうすれば、家の中のものすべてを照らすのである。16 そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かしなさい。

ただいま拝読した聖書の箇所は、山上の説教または山上の垂訓としてよく知られたもので、長年、東北学院の在校生・卒業生に大切にされてきた言葉です。私自身、青春時代を東北学院中学校・高等学校で過ごし、その六年間の毎朝の礼拝を通して多くのことを学びましたが、その中でも最

も心に深くしみているのがこの「地の塩、世の光」であります。その後、大学二年生か三年生の頃に、一冊の本に出会いました。それは、平凡社の「世界教養全集」の中の一巻に収録されていた内村鑑三著の「後世への最大遺物」というものです。これは、明治二十七年に箱根で開催されたキリスト教徒夏期学校での講話をまとめたもので、その後長い間読み続けられています。今ではインターネットで検索しても見ることができません。岩波文庫にも収録されており、青119―4の薄い文庫本で、「後世への最大遺物」と、もうひとつの「デンマルク国の話」が収録されていますので、ご覧いただきたいと思います。私の最も大切にしている愛読書です。

内村鑑三は、子供の頃に自分の父親からもらった漢詩（江戸時代の儒学者であり、詩人である頼山陽が十三歳の時に作った漢文の詩）を紹介し、歴史に名を残すことの是非について切り出します。一方で、キリスト教の宣教師の先生からは、功名心を持つべきでないとしたしなめられたことも紹介しています。しかし、内村鑑三は、「命をくれたこの美しい地球、この美しい国、この楽しい社会、このわれわれを育ててくれた山、河、これらに私が何も遺さずには死んでしまいたくない、との希望が起こってくる。……（中略）……私の名誉を遺したいというのではない、ただ私がドレほどこの地球を愛し、ドレだけこの世界を愛し、ドレだけ私の同胞を思ったかという記念物をこの世に置いて往きたいのである、すなわち英語で言う Memento を残したいのである」と

述べ、それは悪いことではなく、実に美しい青年の希望といえると主張しています。

そして、後世に残すこととしてまず、第一に考えられることとして金（カネ）をとりあげます。例えばフィラデルフィアに住んでいたフランスの商人であつたジラードという人が大金持ちになつて世界一の孤児院を残した話をしています。また、慈善家のピーボディが大金持ちになつて黒人の教育に寄与した話がそれに続きます。

次にはいくつかの土木事業や治水事業などについても触れています。いずれについても大変示唆にとんだ話がつづきます。そして、イギリスの大思想家であり哲学者のジョン・ロックについても述べています。彼は、「一個人というものは国家よりも大切なものである」という十七世紀当時の社会では全く受け入れられない新しい思想を生み出して、「Human Understandings」という本にまとめました。それがフランスに伝わり、ルソーやモンテスキューが読むところとなつて、ついに一七九〇年のフランス革命へとつながつております。このような遺物は素晴らしいことですが、誰でもできることではありません。内村は、引き続き、文学者や教育者についても触れています。

しかし、最後に内村鑑三が強調したことは、これらのいずれでもなく、「勇ましい高尚なる生涯」が後世への最大遺物であつて、これは誰にとつても可能なことであるといっています。そのひと

つの例として、トーマス・カーライルが有名な「フランス革命史」を書いたときの逸話を紹介しています。カーライルが、長年の歴史の研究を凝らし、広く材料を集めてようやく書き上げた膨大な原稿を友人に貸したところ、その友人が明け方まで読んで寝入っている間に朝早くきてストーブの火をつけにきたお手伝いさんがその原稿を燃やしてしまったということです。そのことを聞いたカーライルは腹を立てたことは当然ですが失望のあまり十日ばかりぼんやりとして何もしなかつたそうです。しかし、彼のえちかつたところは、「実にあることについて失望するような人間が書いた『革命史』を社会に出しても役に立たぬ、それゆえにモウ一度書き直せ」と自分を鼓舞して再び長い時間をかけて「フランス革命史」を書き上げたということです。なんとも素晴らしきことではないでしょうか？このような高尚な生涯を送った人がいることを覚えたいと思います。このような人生をおくったトーマス・カーライルという人物がいたということが「後世への最大遺物」であると思います。いいかえれば、「地の塩・世の光」の生きた実例として我々の模範となるのではないのでしょうか？

東北学院大学では、毎週・毎朝の礼拝を守ることができ、その中で聖書の御言葉に触れることができます。また、多くの宗教主任の先生方や、牧師の方々、あるいは、教職員諸氏などからのメッセージに触れる機会があります。これらを聞いて、自分を見つめる機会を持つことができます。

このようなことを通して、自分自身に神さまから与えられている賜物に気が付いて、それをどのように伸ばしてゆけばよいのかを考えて、将来の自分の歩みを確かなものにする事ができると思います。毎日行われる「礼拝」を通して、ともに学んで行くことではありませんか。

「永遠なるもの」

仙台広瀬河畔教会 牧師 望月 修

ヘブライ人への手紙 第二三章八節

8 イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。

絶えず変化する世の中で、私たちもまた変わるものとして存在しています。そればかりか、この世に生まれた私たちは、また、死ぬゆく存在としてあります。そういうことから、私たちは、折りに触れて、永遠を思い、永遠であることを願います。

例えば、人は、お墓を建てます。死んでから、残された者が、という場合がほとんどですが、生きている間に建てる者もいます。身近なところでは、平泉の「金色堂」があります。たいへん壮麗です。壮麗だけでなく、巨大なものとしては、「ピラミッド」があります。墓を建てるといのは、人間に固有なことですが、それは、永遠への憧れや永遠に生きたいとの願望の現れではないでしょうか。

しかし、壮麗な金色堂はもとより巨大なピラミッドさえも、実は、長い年月をかけてではありませんが、徐々に朽ちてゆきます。墓さえ、崩れるのです。滅びます。永遠なるものは、この世に存在しません。

しかし、聖書は、主イエス・キリストについて、このように語っています。「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です」（ヘブライ一三・八）。世界も、私たちも変わります。永遠ではありません。そればかりか、滅んでゆく存在としてあります。ですから、聖書は告げます。この滅びゆく世界とこの私たちを救済することがおできになる御方がいる、と。救い主イエス・キリストであります。この救い主イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない、と。

このような救い主が永遠にわたって存在していることに、私たちは慰められ、励まされます。私たちの希望の拠り所となり得るからです。私たちは、この永遠に変わることのない、救い主イエス・キリストを、どのように知ることができるでしょうか？

旧約聖書の中に、イスラエルの王たちのことを記録した書物として、「列王記」があります。歴代の王たちの業績などが記されているのですが、多くは神に背いて悪を行っています。そこで、その王たちのもとに、神から預言者たちが遣わされます。

代表的な預言者に「エリヤ」がいました。彼が遣わされたのは「アハブ王」の時代です。アハブ王は、神に従おうとせず、妻イゼベルの言いなりに偶像礼拝を蔓延させました。その結果、人心は乱れ、国情も不安定に陥ってしまいました。預言者として遣わされたエリヤは、民を煩わせているアハブ王を非難します。そのために、王の妻イゼベルに命を狙われるようになります。恐れれた彼は、身を隠そうと逃亡し始め、その果てには自害することさえ考えるようになりました。

少し情けない気もしますが、要するに、迫害に遭ったのです。挫折感と孤立感から自害することを願った彼でしたが、その願いは叶えられず、ついに、シナイ山に至ります。その山は、かつて、モーセを指導者としたイスラエルの民が、神と契約を交わした場所でした。そこで、エリヤは、神と出会うこととなります。

私たちが、永遠なる神と出会う、あるいは、神の言葉を聞くというのは、この時のエリヤのように、順調な時よりも、困難に際してでありましょう。危機に直面してです。自分の存在そのものが問われるような時です。言い換えれば、私たち自身が決して永遠でないこと、むしろ滅びゆく存在であることを思い知らされたような時です。自分の脆さ、儚さ、不確かさが、自覚された時です。そのような時に、私たちは永遠なる神と出会う機会が与えられるのです。

エリヤの神との出会いについて、このように書いてあります。「主は、『そこを出て、山の中で

主の前に立ちなさい』と言われた。見よ、そのとき主が通り過ぎて行かれた。主の御前には非常に激しい風が起こり、山を裂き、岩を砕いた。しかし、風の中に主はおられなかった。風の後に地震が起こった。しかし、地震の中にも主はおられなかった。地震の後に火が起こった。しかし、火の中にも主はおられなかった。火の後に、静かにささやく声が聞こえた」（列王記上二九・一一一—一二）。

山を裂き、岩を砕く、「激しい風」が起こりました。しかし、そこに、神がおられたわけではありませんでした。「地震」が起こりました。しかし、そこに、神がおられたわけではありませんでした。続いて、「火」が起こりました。しかし、そこにも、神がおられたわけではありませんでした。そうではなく、その後に、「静かにささやく声が聞こえた」のであります。「それを聞くと、エリヤは外套で顔を覆い、出て来て、洞穴の入り口に立った。そのとき、声はエリヤにこう告げた。『エリヤよ、ここで何をしているのか。』」（同一九・一二）。

神の問いかけに、エリヤは、自分は独りでないこと、神から与えられた使命があることを自覚させられ、命じられたことを受け止め、「来た道を引き返し」（同一九・一五）て行くことになりました。再び、預言者として立ち上がったのです。

こんにちを生きる私たちにも、実は、このような時が必要です。日常の生活から一時逃れてです。

自分に与えられた使命、生きる意味や目的を見出すためです。わけても、行き詰まりを覚えた時には、なおさら必要でしょう。一人、静かに、永遠なる神を思う時です。

こうした礼拝が、そのような時であります。永遠なる神は、私たちには、「静かにささやく声」として、御自身を現されます。それは、神の、この地上における在り方を象徴しています。

神から遣わされた救い主イエス・キリストが、実に、このような存在でした。イスラエルの王国時代に活躍した、もう一人の著名な預言者「イザヤ」は、神がお遣わしになられるメシア（キリスト）である主イエスについて、このように預言していました。「彼は口を開かなかつた。屠り場に引かれる小羊のように／毛を切る者の前に物を言わない羊のように／彼は口を開かなかつた」（イザヤ五三・七b）。この預言の言葉通り、主イエスは、救い主として、この世に遣わされました。

聖書は、この救い主を、次のように告白しています。『この方は、罪を犯したことがなく、／その口には偽りがなかつた。』／ののしられてものしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。そして、十字架にかかつて、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました」（1ペトロ二・二二―二三）。それ故に、聖書はまた、このようにも告白しています。「十字架の言葉は、滅んでいく者にとつては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です」（1コリント一・一八）。

この世の喧噪の中を声高に叫ぶのではなく、また、時代を支配している思想、雰囲気……。そうしたものは違う在り方、別のものとして。しかも、「静かにささやく声」として。愚かとも思える「十字架の言葉」として。神は、「きのうも今日もまた永遠に変わることのない方」である救い主「イエス・キリスト」において、私たちに語り掛けているのです。そのような仕方において、私たちのような存在を遙かに越えた、しかし、滅びゆくこの私たちと世界とを救うことのできる、永遠なる神が、確かにおられるのであります。

父なる神。

爽やかな朝、こうして、一時、日常的な営みから離れて、共に神の言葉を聞く時を与えられました。幸いを感じたいします。私たちは、脆く儂い存在です。困難に直面し行き詰まりを覚えている者もおります。そのような私たちに、御子イエス・キリストにおいて、永遠なるあなたが語り掛けてくださっていますことに慰められ、励まされ、そして希望を与えられます。

今、ここに、私たちは、共に告白することができます。「イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です」と。

この祈りを、私たちの主イエス・キリストの御名によって、祈ります。アーメン

「神の業が現れるために」

宮城野愛泉教会 橋 爪 忠 夫

ヨハネによる福音書 九章一―七節

1 さて、イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えない人を見かけられた。2 弟子たちがイエスに尋ねた。「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか。」3 イエスはお答えになった。「本人は罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。4 わたしたちは、わたしをお遣わしになった方の業を、まだ目のあるうちに行わねばならない。だれも働くことのできない夜が来る。5 わたしは世にいる間、世の光である。」6 こう言ってから、イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。7 そして、「シロアム——『遣わされた者』という意味——の池に行つて洗いなさい」と言われた。そこで、彼は行つて洗ひ、目が見えるようになって、帰つて来た。

ヨーロッパのドイツに、地図で見ますとドイツの真ん中より少し北寄りですが、ビーレフェルトというところがあります。この町は第二次世界大戦の頃、そしてその後大変に有名になりました。今読んだ右の聖書箇所に関連して、その話をしましょう。これはわたしがずっと以前に聞いた話で、今でもよく覚えているものです。

ドイツの第二次世界大戦の頃、世界史でよく知られているのは、ヒトラーという独裁者が出て来てヨーロッパ、ひいては世界を征服しようと戦争を起したことです。わたしもそうでしたが、若い頃は戦争の華々しいところに目を奪われていました。ところがそういう戦争の中で、本当は何が起こっているのかは、少し時が経ち、冷静に物事を振り返るようになってくるとなかなか分かりません。ナチス・ドイツによつてユダヤ人たちにどんなに残酷なことが行われたかが分かつて来たのは、少し時が経つてからです。感銘深くて、わたしがよく覚えているのは、こういう話です。ナチス・ドイツは世界を征服するためにドイツ国民にしきりに訴えたのは、ドイツ民族、ゲルマン民族は世界で最も優れた民族だと言つて、その優秀さを鼓舞しました。そしてそれを裏返せば、そうでない人種やその優秀さを發揮できないいろいろな障害を持った人々を徹底的にさげすみました。人種差別政策です。「アーリア條項」と呼ばれるものです。ですから他の人種、そ

して戦争に役立たない弱い人間、身体的精神的に欠陥がある人々を人間扱いしませんでした。平気で抹殺しました。その典型が数百万人にも及ぶ有名なユダヤ人虐殺です。それに用いたガス室です。それがどんなにヒドいものであったかは、現在のイスラエル共和国のエルサレムにあるユダヤ人迫害記念館に行くとわかります。そういう中で、ビーレフェルトという町が有名になったのは、ポードルシュヴィンク父子という二世代にわたる牧師がいて、弱い人間、身体的精神的に欠陥のある人々を命がけで守り抜いた——そこにそのような人々を庇護し、彼らの楽園となるような施設——ベートル（元はヘブライ語で「神の家」の意）を造って、大戦のさ中も、ヒットラーに屈せず、守りぬいたからです。それは戦後の世界の福祉事業の手本となった施設です。

人の価値は外見によらない。たとえ欠陥や障害があつたとしても、神さまの目からは同じだ、人間として尊いのだということ。その精神的支柱になつているのが、右の聖書の言葉です。

生まれつき目の見えない人をイエスとその弟子たちが見かけたとき、弟子たちは先生のイエスにこう問いました。この人が目が見えないのは、本人の罪か、それとも親の罪によるのか、と。イエスはこう答えられました。本人の罪でも、両親の罪でもない、「神の業がこの人に現れるため」（4節）だということ。目に見えないこと、不自由な人、人として欠陥があると思えることも、

何かその原因を探るためにあるのではない。そこに神の業が現れるためなのだ、弱さにも、不自由さにも、意味がある、そこに神の不思議なみ業がなされる、そのためにあるのだということ。わたしは聞いて、さらに感銘を受けたのは、そのことを話してくれたわたしの先生が、そこを訪ねたとき、そのペーテルで最も重い不自由な人——それは一見、節くれだつた材木が横たわっているのでは、と思えるほど重度の障害を持った人——その人のことをペーテルでは、この人こそペーテルの宝だと言っているのだそうです。そこに神の業が現れるため、それをこの施設の人々は目を輝かせて語っていたそうです。

強力なナチスの権力に屈せず、重度の不自由な人々を命がけで守り抜く、そしてそこに神の業が現れるためだと期待するのは、ただ弱者を包み、その痛みを共有するのは違う、何か強い大きな確信があるのではないでしょうか。神の働きは、その程度のものではない。ある聖書の註解者は、その確信の底には、イエスによって、それまでの力や人間の武力に頼るのではない、全く違う新しい時代が来たのだという確信が読み取れると語っていますが、そうではないでしょうか。「神の業が現れるため」とは、どんな大きなこの世の力にも屈しないほどの、神による新しい業、新しい時代が来ているのだということなくして、言い切り、それを行動に移すことはできないで

しよう。ここに、この言葉の内にある底力とそこに開かれる新しい希望があると印象づけられるのではないでしようか。

「沈黙の時」

仙台五橋教会 宮川 経宣

ルカによる福音書 一章十九〜二〇節

19 さて、天使は答えた。「わたしはガブリエル、神の前に立つ者。あなたに話しかけて、この喜ばしい知らせを伝えるために遣わされたのである。20 あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかつたからである。」

明日から、クリスマスを待つ待降節に入ります。そしてアドベントクランツを飾り、一本一本のローソクに火が灯る度に、いよいよクリスマスが近づいてくる事を知り、クリスマスの準備をして待つものなのです。

さて、クリスマスの記事伝えるルカ福音書一章五〜二五節 (P99) には、バプテスマのヨハネの誕生とその父親となった祭司ザカリアの記事が記されています。そこでルカ福音書一章八節

以下、ザカリアは神殿において、祭司としての職務についていました。香をたきイスラエルの為に祈りを捧げているその時、天使ガブリエルが彼の所に現われ、そして妻エリザベトが男の子をみごもり、ザカリアが父親になることを告げます。子を授かることが大いなる神の祝福であると考えられていた当時、子供のいないザカリアにとってこの天使の知らせは、この上ない喜びでした。しかし、彼は、その十八節で「何によつて、わたしはそれを知ることができるのでしょうか。わたしは老人ですし、妻も年をとっています。」と反論したのです。

そこで天使ガブリエルが、十九節以下、「あなたは口が利けなくなり、この事の起こる日まで話すことができなくなる。時が来れば実現するわたしの言葉を信じなかつたからである。」と答えた時から、ザカリアは息子ヨハネの誕生の時まで、本当に口がきけなくなり、沈黙の時を余儀なくさせられるのです。そしてこのことは、私たちに一体何を意味しているものでしょうか。

使徒言行録十七章一〇〜十五節 (P247) において、テサロニケで、パウロの語る福音を受け入れなかった大部分のユダヤ人たちの怒りと妬みによって暴動を起こされ、町中を騒がせ、やむなくテサロニケの町から退去することになった。パウロたちは、夜の間にかろうじて、ベレアに逃れることが出来ました。

あらゆる苦難と患難の中でありながら、パウロたちは、ベレアに着くと、ここでも、まずユダヤ人の会堂に入り、福音を宣べ伝えます。その伝道の働きの結果、「そのうちの多くの人が信じ、ギリシヤ人の上流婦人や男たちも少なからず信仰に入った。」のです。それは本当に大きな喜びでありました。しかし、事態は急変します。テサロニケのユダヤ人たちは、パウロがベレアでも、神の言葉（福音）を伝えている事を知ると、何とベレアにもやってきて、人々をそそのかしたので、パウロは、また町を追われ、海辺へ来て、アテネへと向かわざるを得なくなりました。まさしく、パウロたちにとって、このテサロニケとベレアでの旅、伝道の活動は、主イエスの生涯と同じく一難去つてまた一難と迫害が続き、ここでもベレアの町からの退去を余儀なくされるものとなつたのです。

ここに、単独でアテネへと向かうパウロの心境は果たしてどのようなものでしょうか。おそらくあの祭司ザカリアが、口がきけなくなり、沈黙と暗闇の時を過ごすのと同じなのではないかと考えられます。しかし、パウロは祭司ザカリアとは異なり、そのような苦難の中で、パウロひとりアテネへと向かいました。そこにパウロは何が神の御旨と考えたのでしょうか。それは何より「弱さ」を物語るものであると思われます。一人になる弱さ。離れて別れてしまう弱さ。しかし、その弱さの中に主の力と恵みが十分に働く事を思つたのではないだろうか。それはⅡコリントの

信徒への手紙十二章九〜一〇節 (P339) で、「すると主は『わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に發揮されるのだ』と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るように、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。何故なら、わたしは弱いときにこそ強いからです。」とパウロが語っているからです。

そこから、マタイ福音書十八章一〜五節 (P34) の「天の国で一番偉い者」でイエス・キリストが一人の子どもを抱いて言われた「自らを低くする」とは、パウロがここで語る「弱さ」を意味すると考えられます。子どもの大人になれない弱さ、自分の弱さを思うゆえに自らは低くすることしか出来ない。それが真に天に通じる「弱さ」であることを学び知るものです。キリストは私たちの「弱さ」「低さ」をいつも見ておられる。そして私たちが真に弱い時にこそ、一人の子どもがキリストに抱かれたと同じように、私たちはいつも守り支えられ、贖われ、救われるのではないのでしょうか。一方、祭司ザカリアが、このことに気づいたのは、ヨハネ誕生の時に至ったことでした。

今日の御言葉を通して、今私たちが、深く知りたいのは、神の選びという事柄であろうと思

ます。ヨハネ福音書十五章十六節 (P199) に「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだ。」とあるように、もし私たちが、イエス・キリストを選んだというなら、また私たちの思惑で、キリストから離れることもあるでしょう。けれども、神の選びは、イエス・キリストが他でもなくあなたがたを区別も差別もなく、或いは罪深い者でさえも選んでくださる。それが神の選びであります。ですから神の選びは他でもなく特別な恵みであると言えます。この恵みを信じて、この神の選びの中に生きることが大事なのです。そしてこの神の選びの中に生きる限り、私たちにはいつも神の守りと永遠の命に至る救いが約束されています。大きな喜びが待っています。しかし、私たちはいつも人の基準で神の言葉を聞き、また自分自身ばかりを見て、主なる神を、また救い主イエスをすぐに見失うのです。困難や苦難にあえば、すぐに躓く。すなわち、このパウロや祭司ザカリアの出来事から、私たちは自分の知識や知恵、力や経験、そして人の理解を超えた神の働きが展開されていることを気づき、主イエス・キリストを人生の土台において生きることこそ、何事があつても変わらぬ、揺るぎない救いをいつも待望することが出来ることを知ります。今私たちがクリスマスを待つのは、そのような意味があることを知り、沈黙と暗闇のクリスマスではなく、喜びと救いに満ちたクリスマスを迎えることができるよう祈り求めたいと思います。

【祈り】

永遠にして変わることはない主なる神よ、あなたは世々の人々の希望と喜びにいまし、いつの世にも人々に力を与えて、あなたを求めさせ、また求める人々に救いを見出させてくださいました。

どうか、主キリストのご降誕を待ち迎える私たちにも、あなたの真理の幻をより明らかに、御力への信仰をより強く、あなたの愛と確信をより確かなものとなるように、このアドベントの間を守り導き、あなたの御子キリストの誕生を心から喜びと救いをもって受け止める者とさせていただきます。

また今、私たちにある境遇や様々な状況、それが私たちにとって、益であろうとも不益であろうとも、その事を通して、神は何を私たちに求めておられるのか、そのことをいつも信仰によって注意深く知ろうと自らの心の声を聞くものでなく、むしろ神の御声をいつも聞き、しっかりと受け止める者、また待望する者であるように励まし、支えてください。またそれが新しい恵みと希望へとつながることを知る者とさせてください。

これらの祈りを私たちの主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン

「仕える人になりなさい。」

塩釜キリスト教会 山田 崇浩

マタイによる福音書 二十章二十節～二十八節

20 そのとき、ゼベダイの息子たちの母が、その二人の息子と一緒にイエスのところに来て、ひれ伏し、何かを願おうとした。21 イエスが、「何が望みか」と言われると、彼女は言った。「王座にお着きになるとき、この二人の息子が、一人はあなたの右に、もう一人は左に座れるとおっしゃってください。」22 イエスはお答えになつた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっているか。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか。」二人が、「できます」と言うとき、23 イエスは言われた。「確かにあなたがたはわたしの杯を飲むことになる。しかし、わたしの右と左にだれが座るか、わたしの決めることではない。それはわたしの父によって定められた人々に許されるのだ。」24 ほかの十人の者はこれを見て、この二人の兄弟のことで腹を立てた。25 そこで、イエスは一同を呼び寄せて言

われた。「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。26 しかし、あなたがたの間では、そうであつてはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕えるものになり、27 いちばん上になりたいたいは、皆の僕になりなさい。28 人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

主イエスに従った弟子たちの中に、ゼベダイの息子すなわちヤコブとヨハネの兄弟がいました。この兄弟の母親があるとき主イエスの前に来て、「主イエスが王座に着かれる時には、自分の息子たちを一人は右に、一人は左に座れると約束してください」と願ったのです。すると、主イエスはこの母親と息子たち兄弟に言われました。

「あなたがたは、自分が何を願っているのか、分かっているか。このわたしが飲もうとしている杯を飲むことができるか。」

実はこのお話の直前にも、主イエスは、ご自分が捕らえられ侮辱され鞭打たれ、死刑囚として十字架に付けられるのだ、と十字架の出来事を予告されていました。しかしなお、ヤコブもヨハネも彼らの母親も、そのことの意味が分かっています。あるいは分かりたくなかったの

かもしれません。

神の与えてくださった救い主は、地上の国家の王様、権力者になられる方ではなく、神を信じることのない罪人たちのために自らをささげ尽くし命を与えられる方だったのです。自らを犠牲としてささげることが使命とする、そしてそのことを通して神の愛を啓示することを使命とされていたのが、真実の神の子でした。そして、その左右に座るとは、決して力を誇り、人々を支配するような、地上の権力者になることではなくて、主イエスとともに、主イエスが体験される、あの十字架の苦しみを、「死の杯」を共に味わうことなのでした。その杯を、この痛みを君たちは共に担うことができますか。主イエスの問いかけはそのような内実を持った言葉でした。

でも、一人の弟子たちは、躊躇なく、いやその内実を理解することなく、「できます」と答えました。さらに仲間の他の弟子たちもまた主イエスの十字架、受難という出来事をまだ予告されても受け止めることも、理解することもできていなくて、ヤコブとヨハネがいわば大臣の椅子を抜け駆けしてお願ひしたのだと思い、怒ってしまいました。そこで、主イエスは弟子たちを呼び寄せて言われました。

「あなたがたも知っているように、異邦人の間では支配者たちが民を支配し、偉い人たちが権力を振るっている。

しかし、あなたがたの間では、そうであつてはならない。あなたがたの中で偉くなりたい者は、皆に仕える者になり、いちばん上になりたい者は、皆の僕になりなさい。人の子が、仕えられるためではなく仕えるために、また、多くの人の身代金として自分の命を献げるために来たのと同じように。」

実に、本当の救い主は、主イエスは、王様のようにこの世において権力をふるい、人々に仕えられるような人ではなかつたのです。人々に仕えられる王ではなかつたのです。反対に、ご自分のことを、そして神のことを信じることのできない人々のために仕えてくださる方だつたのです。そして、ただ召使いのように仕えるというのではなくて、そうした人々のために、その罪から人々を解き放つための代金として自らの命をささげてくださるといふ形で、命を支払つても仕えてくださる方だつたのです。いわば命をささげてくださる究極の僕となつてくださることが、本当の救い主の使命だつたのです。

そして、この本当の救い主の左右に座るとはすなわち、この自らを捧げられ、そのために死の苦しみをも担つてくださる方の姿に倣うということなのでした。ですから主イエスの左右に座ることとは、ヤコブとヨハネの母親が望み、当人たちも望んだこととは、自分たちがこの世の榮譽を求めることでも、力を求めることでも、この世において人々に仕えられることでもなくて、人々

に仕える人になることなのでした。彼らは、自らはその意味を知りませんでした。何を望んでいたのか、自分でも知らなかったのです。誤解していました。

しかし、なお、実際に主イエスの十字架という出来事に直面し、人々に命を捧げて仕えてくださって死んでくださった主イエスのお姿を拝見し、復活のキリストとの出会いが与えられて、彼ら自身もまた神の、そして神の愛する人々のために仕える僕となつていく人生を歩むことができるようにされていったのでした。

人の幸いはけつして自分のためだけの人生のなかにはありません。あるいは、人を従わせ人を仕えさせるだけの人生には、本当の幸いはありません。世の中にどれほどの力を誇った人でも、寂しさや苦しみのなか、満たされることのない不満のなか、悲劇の生涯を送らざるを得なかった人は枚挙にいとまありません。

自分の周囲の人々に仕える人生においてこそ、本当の自己実現もかない、あるいは喜びが実現していくのです。人に仕えられる人になりたいなら、自分の幸いばかりを求める人生ではなくて、人に仕える道を歩みましょう。そうすれば、気がついたとき、多くの人々があなたを支えてくださっていることに感謝しつつよりよき道を歩んでゆけるでしょう。周りの方々に仕え、人々から「ありがとう」といわれるとき与えられる喜びなくして本当の幸いな人生はないのです。

まず、あなたのために、神の子、主イエスが、命をささげて仕えてくださっているのです。そしてその十字架に献げられた主イエスの命の故に、あなたが人々を愛し仕えるための力もまた既に与えられているのです。理解できなかつた弟子たちでしたが、そんな弟子たちに対する神のご計画は、まさにこの弟子たちが「仕える」人生を歩むことであり、その神のご計画は、主イエスが言われたとおり実現しました。わたしたちに対する神のご計画もまた「仕える人」となることであり、そのための勇気も決心も実行力も神から必要なときに必要なだけ与えられるのです。そしてそのことを通して神の愛の光、御栄光がこの世においても輝くのです。

「思い悩み」

東北学院中学校・高等学校宗教主任 松井浩樹

マタイによる福音書六章二・五節～三四節

25 「だから、言っておく。自分の命のことで何を食べようか何を飲もうかと、また自分の体からだのことで何なにを着きようかと思おもい悩なやむな。命いのちは食物ものよりも大切たいせつであり、体からだは衣服いふくよりも大切せつではないか。26 空そらの鳥とりをよく見みなさい。種たねも蒔まかず、刈かり入れいれもせず、倉くらに納おさめめもしない。だが、あなたがたの天てんの父ちちは鳥とりを養やしなつてくださる。あなたがたは、鳥とりよりも価値かちあるものではないか。27 あなたがたのうちだが、思おもい悩なやんだからといって、寿命じゅみょうをわずかでも延のばすことができようか。28 なぜ、衣服いふくのことで思おもい悩なやむのか。野のの花はながどのように育そだつのか、注ちゅう意いしてみなさい。働はたらきもせず、紡つむぎもしない。29 しかし、言いっておく。栄華えいがを極まめたソロモンソロモンでさえ、この花はなの一つほどにも着飾きざつてはいなかった。30 今日きょうは生はえていて、明日あすは炉ろに投げ込まれる野のの草くさでさえ、神かみはこのように装よそおつてくださる。まして、あなたがたにはなおさらのことではないか、信仰しんこうの薄うすい者ものたちよ。31 だから、『何なにを食たべようか』『何なに

を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。32それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。33何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。34だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦勞は、その日だけで十分である。」

今日の聖書は「思い悩むな」という言葉が繰り返して語られています。繰り返されているということは、2000年前の人間も現代を生きる私たちと同じく、大いに「思い悩み」に生きていたということでもあります。つまり、私たち人間は今も昔もいかに「思い悩み」つつ生きているのか、ということがまず指摘できるのであります。そしてさらに、真面目にきちんと目標を掲げて、考えつつ生きようとすればするほど、その「思い悩み」は深いものとなるのです。そのために、私たちは、例えば趣味に没頭したり、気分転換をしたり、問題を直視しないようにする、また誰かに相談をするといったような仕方、大方の人がうまく自分をコントロールしつつ「思い悩み」につきあって生きている、それが私たちの現実といえるでしょう。

「思い悩み」・・・仏教でいうところの「煩惱」であります。この煩惱から解放されると「悟りの境地」に達するのです。しかし、その「悟りの境地」は、朝起きたらいつの間にか「悟りの境地」に達していたなんてことは起こりえません。それに達するためには様々な厳しい修行を長期間、実行しなければならぬのです。ブツでさえも、六年間の山籠りをして、苦行を経験して「悟りの境地」に達したといわれるほどです。

そこでキリスト教では、主イエスが「思い悩むな」と語られています。特別な修行や、苦行は語られておりません。文脈からすると、そういう行為、行動によって悩みが無くなる、ということではなく結論から言うと、こういうことになります。「思い悩み」は今も昔も変わることなく、なくなることはない。いや、2000年前よりも現代社会の方が複雑で、その悩みは深化しているのかもしれない。だけれども、そういった「思い悩み」に支配されて生きるといよりは、むしろ「思い悩む」ことを超える神の守りと導きが必ずある、だから思い悩むことなく、神を信じて今を生きていく。これが聖書の文脈であります。

しかし、ただ無責任に「神がいるのだから、気楽に歩んでゆきましょう」ではありません。聖書の言葉を見てみましょう。まず、二五節の言葉です。「だから、言うておく。自分の命のこと、何を食べようか何を飲もうかと思ひ悩むな。命は食べ物よりも大切であり、体は衣服よりも大

切ではないか」。日々の生活での「思い悩み」であります。私たちにとっては、さほど問題ではないのかもしれませんが。食べるものであれ、着るものであれ、贅沢を言わない限りあるのですから。しかし、この聖書が描かれた当時の生活に照らしますと、問題は深刻です。現代の私たちのようではないのです。不自由がない人は、ほんの一部の人々であって、大多数の人々はその日の生活が大変であったのです。今日食べるものがなければ、死んでしまうかもしれない、そういう状況も十分にあったわけであります。その状況を踏まえた上での、主イエスの言葉であります。主イエスはこう言われております。「自分の命のこと、自分の体のこと」で「思い悩むな」であります。ここで言われる、「自分の命・自分の体」、わかりにくいかもしれませんが。「命」は「魂」と考えて結構です。つまり内面の問題、心の問題をさします。私たちの「心」はどうでしょうか。満たされていくでしょうか。とりわけ、私たちが属する現代社会の心は、何を頼りに、どこを向いて行くかとしていくのでしょうか。相変わらず、耳をふさぎたくないような事件がたびたびおこります。経済不況が叫ばれて久しいところです。物価高騰、にも関わらず税金は増えております。ますます生活をにくい方向へ向かっているように思えてならないのです。

「体」は、そのまま「体」です。ノーベル賞受賞に沸きあがる、科学の目覚ましい進歩は歓迎されるどころです。しかしながら、まったなしの高齢化の問題、介護の問題があります。少子化や

過疎化の問題があります。命、体、いずれも大変な問題を抱えているわけであり、こう考えると、誰もが「思い悩み」に生きている、いや「思い悩」まざるを得ない状況に一人一人が置かれている、ないし置かれていくのであります。

そこで主イエスは言われるのです。「思い悩むな」であります。その理由が、次の聖書の言葉二六節以下になります。鳥、そして花について語られております。確かに、鳥は優雅に空を飛んでいます。しかし、そう見えるのは私たち人間の側からであって、その日の食べ物を得るために懸命に生きているのではないのでしょうか。花もただ時期が来たときだけ花を咲かせているのではありません。花を咲かせることで、花粉や種を作り、子孫を残そうと必死に生きているのではないのでしょうか。そのように、自然を見ながらのんびりと生きていこう、ということではないのです。大切なのは、そのあとの言葉となります。「あなたがたの天の父は鳥を養って下さる」という言葉です。花の場合ですと、三十節です。神が養ってくれること、神が守ってくれること、神が導いておられることを鳥と花を通してみなさい、ここにポイントがあるのです。

震災から三年がたちました。「思い悩むな」。直接的、短絡的な言葉ではありません。よく考えて、きちんと消化してから、この言葉を受け取りたいと思うのです。背後にある、神の守りと導きを心から感謝して、新しい生を営んでまいりたい。そう願うのであります。

祈り

主なる神、礼拝を感謝いたします。よい季節、それぞれがその場その場で、守られて今日を迎えております。感謝する心をはぐくんできださつて、また、新しい希望をもって大学生活を過ごさせてくださいますように。小さな祈り、主の御名によって祈ります。アーメン。

「LIFE, LIGHT AND LOVE FOR THE WORLD」

東北学院榴ヶ岡高等学校 宗教主任 西間木 順

ヨハネによる福音書十五章十七節

「¹⁷互^{たが}いに愛^{あい}し合^あいなさい。これがわたしの命^{めい}令^{れい}である。」

皆さんは東北学院大学のスクールモットーを皆さんはご存じでしょうか。

「LIFE, LIGHT AND LOVE FOR THE WORLD」であります。大学設置50周年を記念に制定された東北学院大学の教育理念を示す標語です。LIFE、LIGHT、LOVEのそれぞれの頭文字をとって、3L精神と言い、東北学院の卒業生に親しまれている、標語であります。今日は3L精神について、共に学びたいと思います。

1919年大正8年、仙台市中心で、大規模な火災が起りました。700戸が焼けてしまいました。東北学院の中等部の校舎も火災により、全焼してしまいました。この火災から二年後あま

り経って、新しい校舎を建てました。この校舎の正面入り口の真上に、LIFE、LIGHT、LOVEの三つの言葉が刻まれました。東北学院の再建、復興の標語となりました。

残念ながら、シュネーダー先生が学内の公式文書において、この3Lについて書かれたものはありません。ただ、当時、東北学院と関係があった教会の機関紙にシュネーダー先生の「生命、光明、愛」という説教が掲載されておりました。おそらく、シュネーダー先生は、学校の礼拝において、この3Lについて、よくお語りになっていたのではないか、だからこそ、新しい校舎を建てたときに、この3Lを掲げたのではないかと思えます。

さて、シュネーダー先生の「生命、光明、愛」と題する説教が、東北学院100年史の中に書かれてあります。

「国民として光輝ある日本の将来に貢献せんがためには、ここに掲げた3つのものを持たなければならぬと思う。

生命とは、普通の生命、すなわち肉体の生命ではない。肉体的の生命は早晚境遇に負けて滅んで失せる弱いものであって、真の生命ではない。真の生命は神から来るものである。しかしして、この神から来る生命は、イエス・キリストの勝利によって与えられる心の生まれ変わった生命である。聖書にある永遠の生命である。この永遠の生命によりて世界が真に新たになるのである。

また日本の将来に光明の必要がある。すなわち知識の光明である。ここで言う知識とは、普通の知識ではなく、人生に取りて最も必要な宇宙の創造者支配者につき、人生の真の道真の目的につきまた人生の運命についての知識を指すのである。それは、イエスが自分は世の光であると宣言した、あの光であり、この光明を自己に所有する人格者となり、これを広く世に伝え、永久に輝くように努める必要がある。

第三に将来の国民にとって欠くべからざるものは『愛』である。…我らは愛は世界において最大のものであると認めるばかりではなく、又同時に世界最大の要求であることも認めねばならぬ。今日愛の力は真に乏しく、現代文明の最大の欠陥は愛である。……愛の精神に満ち溢れ、真心から奉仕を喜ぶ人物は、日本の将来のため何よりも必要である。

このように命と生命と愛とは将来の日本人がぜひ備えなければならない資格であり、そのとき日本人はまた『人類の一人として光輝ある生涯を送ることが出来るであろう。』

今日は共にヨハネによる福音書15章17節を読みました。ヨハネによる福音書のキーワードは「生命、光明、愛」です。このヨハネによる福音書のキーワード「生命、光明、愛」の3語を標語として掲げたことは、言い換えれば、東北学院の信仰の告白と言うことができます。

少し補足説明をいたしますと、生命とは、主イエスを通して私たちに教えられた神の言葉を、

心に刻むことであります。主イエスは、「わたしは命のパンである」と言われております。聖書は、人間を語る際に、体と心からできていることを語っています。体を成長させると同じように、神の言葉によって、心を養わなければならないと言っているのです。私たちは、礼拝の中で、この神の言葉を聞き、心に刻んでおります。その神の言葉によって、慰められもしますし、励まされもします。生きる力が与えられています。光とは、私たちがどう生きたらよいのか、その歩む道を照らしてくれるものです。また本当の知識は、神が与えてくれるものであります。旧約聖書、箴言には、「主を畏れることは知識のはじめ」と書かれてあります。またカルヴァンは、人生の主目的は神を知ることであると言っています。

私たちの周りには、傷ついた人もいます。絶望の中で、あるいは困難な生活を強いられている人もいます。そのような人の命を尊いものとし、その人に、本当の慰め、生きる力を与える働きをする、それが、主イエスにならう隣人への愛の実践となるのであります。

LIFE, LIGHT, LOVEとどうも精神を通して、常にそのことを東北学院は教えているのであります。ですから多くの卒業生の心にLIFE, LIGHT, LOVEと言う言葉が刻まれているのであります。東北学院の卒業生について、シュネーダー先生が、アメリカのミッションボード、宣教師を送る団体に送った年次報告書の中に書かれてあります。「They are christian in their living and

thinking」。東北学院の卒業生は、みなキリスト教的である。たとえクリスチャンでなくても。」このシュネーダー先生の思いは、今も、これからも変わることがないのです。

〈祈り〉

父なる神

新しい命を与えてくださり、この学校に招いてくださり感謝いたします。

あなたの招きに応え、共に礼拝を捧げることができまことを感謝いたします。

どうぞ、私たちが心にあなたの御言葉である、「LIFE LIGHT LOVE」を刻むことができますように。

そのために、あなたの御言葉を謙虚に聞くことができますように。

自分のことだけを考えるのではなくて、他の人のことをも考えて行動することができますように。

そしてこの学校に集うすべての者が、今日もこの学校に来て良かったと思える一日にすることができますように。

今この場におりません友のために、祈る心を与えてください。

すべてのことを当たり前だと思うのではなくて、どんなことにも感謝する心を与えてください。

この祈り尊い我らの主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン

「命は人間を照らし出す光」

宗教部長 佐々木 哲夫

詩編三六編六ノ十節

6 主よ、あなたの慈しみは天に

あなたの真実は大空に満ちている。

7 恵みの御業は神の山々のよう

あなたの裁きは大いなる深淵。

主よ、あなたは人をも獣をも救われる。

8 神よ、慈しみはいかに貴いことか。

あなたの翼の陰に人の子らは身を寄せ

9 あなたの家に滴る恵みに潤い

あなたの甘美な流れに涙きを癒す。

10 命の泉はあなたにあり

あなたの光に、わたしたちは光を見る。

ヨハネによる福音書一章六〜九節

6 神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。7 彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によつて信じるようになるためである。8 彼は光ではなく、光について証しをするために来た。9 その光は、まことの光で、世に來てすべての人を照らすのである。

クリスマスの視座

神の超越的実在と地上の有限的実在が交差した出来事であるイエス・キリストの誕生から二千年ほど経った私たちは、二〇一四年のクリスマスに何をしようとしているでしょうか。預言者イザヤが見たインマヌエル誕生の二重景色や占星術の学者や羊飼いたちが訪れた乳飲み子などを見ることでしよう。ここでは、私たちの視座をイエス・キリストと同時代に生きた洗礼者ヨハネに遡らせてメシアの到来を見つめたいと思います。

命の光の到来

さて、洗礼者ヨハネは、イエス・キリストの到来を「まことの光が世に来てすべての人を照らす」出来事だったと証言しています。その光はただの光ではありません。福音書記者は、当該文脈の4節において「命は人間を照らす光であった」と表現しています。イエス・キリストは、光として到来し、しかも、命の光としてすべての人を照らし出すというのです。暗闇の中に輝く光であるとしたか表現しようのないその実体は、命でした。クリスマスツリーを飾るイルミネーションやロウソクの光のようなものではなく、死と対照される命の光がこの世に到来したのです。

最初のクリスマスから二千年ほど経過した時代に生きている私たちですが、洗礼者ヨハネのように命の到来を身近な出来事として実感したいと思えます。そこで、その出来事をバック・ライトのように浮き彫りにする詩編36編10節「命の泉はあなたにあり、あなたの光に、わたしたちは光を見る」に注目したいと思います。少なからず詩編の注解者たちは、この章句をイエス・キリストの誕生と共鳴させております。

命の泉を求めて

さて、詩編の記者は、命そのものである神ご自身をまことの光・命の泉と表現しています。〈泉〉

の原義は、水を求めて土を掘る動作に由来しています。井戸を掘るという日常的な状況ではなく、乾燥地帯の者が水を求めて一生懸命に土を掘る姿を反映しての言葉です。〈泉〉は、旧約聖書に18回記載されていますが、ここでは数箇所を参照します。

預言者エレミヤは、主を捨てることは悪であり、それを「命の泉〔源〕を捨てた」と表現しています。(2・13、17・13)。また、預言者ゼカリヤは、偶像崇拜者や偽預言者たちを一扫する「罪と汚れを洗い清める一つの泉が開かれる」(13・1)ことを語っています。いずれも、かなりの緊急状況を描写するものです。私たちが注目する言葉は、箴言に記されています。「主を畏れることは命の源〔泉〕、死の罟を避けさせる」(14・27)です。クリスマスが出来事を浮き彫りにするバツク・ライトとして響いてきます・すなわち、まことの光・命の光の到来に立ち会う者の姿は、主を畏れる者のそれであるということです。洗礼者ヨハネの言葉「あの方は栄え、わたしは衰えねばならない」(ヨハネ3・30)を連想させます。

私たちを見つめる時

さて、旧約聖書の人々や最初のクリスマスの時の人々は、メシアの到来を待望しました。換言するならば、人間から神の方向に向かっていたのです。しかし、イエス・キリストの誕生は、そ

の方向を逆転させました。まことの光が、世に来たというのです・すべての人を照らすというのです。神ご自身である命の光が私たちの方向に向かって到来したのです。二〇一四年のクリスマスに、命の光に照らし出される私たち自身を見つめたいと思います。

「天からの恵み、地に満ちて」

大学宗教授任 野村 信

マルコによる福音書一章一四〜一五節

14 ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、15 「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

今、お読みしました聖書には、「ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤに行き」と書かれています。人々の中で活躍していたヨハネが捕えられたということがここで言われていますが、実に、悲しい出来事をマルコはあっさりとしています。この当時、捕らえられて獄に投ぜられると、処刑される可能性が高いことを意味します。それにしても、なぜこんなに簡単にヨハネの捕縛を書きとめ、それについて何も語らずに、済ましてしまったのでしょうか。誰に捕らえられたのか、なぜ捕らえられたのかについても一切書いておりません。このマルコによる福音書をす

こしずつ読み進めてきましたが、ここで、ヨハネことについて何も書かれていないのが気かかります。

しかもヨハネという人物は、当時人々から最も尊敬され、期待されていた人でした。人々は続々とヨハネのもとに出かけ、教えを受け、洗礼を授けられ、主イエス・キリストもヨハネから洗礼を受けたのです。そのヨハネが捕らえられたことをマルコは、こんな風にあつさりと扱かっています。ヨハネに対する配慮が欠けているのではないか、という思いを抱くことを禁じえません。

しかし、この点に拘こたわって、しばらく考えてみますと、ここには実に深い意味があるのではないかと思われます。それは、二つの点から語ることができます。

その一つは、ヨハネ自身の語った言葉に注目したいのです。七節にありますように、「わたしは、かがんでその方の履物はきもののひもを解く値打ちもない」というヨハネの言葉です。当時、履物のひもを解くのは最低の身分である奴隷の仕事であると、以前に申しましたように、つまりヨハネは、自分は奴隷にすらなれない、すなわち、キリストの前では、まったく無価値で、無意味な存在であると自覚していたということです。

それは言い換えますと、主イエス・キリストの登場は、人間の尊厳や名声、活躍など比較にならないほど、はるかに高貴で、卓越しているということです。その主イエスが人々の前に登場され、

神の福音を伝え始めた、それは世界の歴史にとって一度だけの、最大の出来事が開始され、その出来事の前では、人々から最も尊敬されていた人ですら、影を潜め、姿を消さなければならぬ、そのようなメッセージがここに込められている、と理解してもいいのではないのでしょうか。

第二の点について語りますと、主イエス・キリストも、この時ヨハネについて何も語っていないです。ヨハネが捕らえられたと聞いて、「なんと悲惨なことか」とか、あるいは「ヨハネよ、本当に今までよくやった、御苦労だった」と、ねぎらいの言葉も掛けた様子はないのです。さらに一步踏み込んで言えば、実際ヨハネはヘロデ大王によって捕らえられたのですが、このヘロデに對して、「こんな良い働きをしているヨハネを捕らえることはあつてはならない」と主イエスは、怒ったり、批判すらしていないのです。

ただ、キリストは「時は満ち、神の国は近付いた。悔い改めて福音を信じなさい」と故郷のガリラヤの人々に告げ始めたのです。すなわち、主イエスは、人間の悲しみも、不条理な出来事も社会の不正や横暴に對しても全然触れないで、「福音」という「喜ばしい知らせ」を告げることを、最大の目標、最高の課題としているということです。

つまり、このヨハネについての沈黙というのは、実は、神の福音の偉大さ、尊さ、難しい言葉で言いますと、「唯一無比性」という崇高で、比類のない大切な出来事を伝えようとしてきている

のではないでしょうか。

その大切な出来事の前に、すべての地上の営みが沈黙する、いや小さくなる、消えてなくなるかのように、このキリストの福音は光り輝き、まばゆく世界を照らしているということなのです。

それは、今、この午前中にも空の星は輝いています。昼間の太陽の光で星がすっかり見えなくなってしまうようなものです。それはあたかも、雨がたくさん降れば、庭木に水をやりたり、畑に水を引くという人間の作業が不要になる、あるいは忘れてしまうくらい、天から嬉しい、恵みの雨が地上にたっぷりと降り注ぐようなものです。

私たちは、このような大きな恵みを神から、天から注ぎかけられて、私たちの営み、私たちが全てが光につつまれる、豊かに潤うるされる、と言われてきているのではないのでしょうか。

ヨハネについての沈黙は、裏返すと、神の福音の偉大さ、崇高さのゆえであり、ここに私たちにとって、かけがえのない命の豊かさ、喜び、朽ちることのない希望と幸いがあるということをも明らかにしています。

主イエスは言われます。「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と。二度も、この短いところで、マルコは「福音」、すなわち天からの喜ばしい知らせという意味の言葉

を書き留めています。マルコはそのくらい福音の到来を喜び、また大切なこととして受け止めました。

マルコによる福音書を読み進めてきましたが、福音の光がさし始めました。主イエス・キリストが宣教の旅を開始されたように、私たちの日々の歩みにおいても、私たちの中に広がる福音の光を喜び、感謝し、それぞれの足取りを幸いなものにしていきたいと思えます。お祈りします。

主なる神様、本日は主イエス様が福音宣教を開始した個所を見ることが出来ました。ヨハネに關しての沈黙が、まさに私たち人類、世界へ、あなたからの大きな光の輝き、恵みの降り注ぎであることを思わざるを得ません。どうか、私たちをこの福音の光、恵みで活き活きと生かしてください。何よりも学生一人一人の学びとその歩みを祝し、導いてください。このお祈りを主の御名によってお捧げいたします。アーメン。

(泉キャンパス大学礼拝 十一月七日)

説教「希望の源」

大学宗教学主任 原口尚彰

¹主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れて

わたしが示す地に行きなさい。

²わたしはあなたを大いなる国民にし

あなたを祝福し、あなたの名を高める

祝福の源となるように。

³あなたを祝福する人をわたしは祝福し

あなたを呪う者をわたしは呪う。

地上の氏族はすべて

あなたによつて祝福に入る。」

4 アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。

アブラムは、ハランを出発したとき七五歳であった。5 アブラムは妻のサライ、甥のロトを連れ、蓄えた財産をすべて携え、ハランで加わった人々と共にカナン地方に入った。6 アブラムはその地を通り、シケムの聖所、モレの檜の木まで来た。当時、その地方にはカナン人が住んでいた。

7 主はアブラムに現れて、言われた。

「あなたの子孫にこの土地を与える。」

8 アブラムは、彼に現れた主のために、そこに祭壇を築いた。

アブラムはそこからベテルの東の山へ移り、西にベテル、東にアイを望む所に天幕を張って、そこにも主のために祭壇を築き、主の御名を呼んだ。9 アブラムは更に旅を続け、ネゲブ地方へ移った。

(創世記二二・一九)

人間の生活には過去・現在・未来という三つの側面があります。一般的に言われているのは、青年は未来に生き、壮年は現実に生き、老人は過去の追憶に生きるということです。例えば、青

年は若いのでまだ自分がどのような人間になるのか決まっています。未来の生活はまだ現実ではないのですが、それだけに様々な可能性が開けています。しっかりと意志を持ち、一定の方向性を持って努力をすれば、それなりの目的を達成することが出来ます。それに対して、壮年は既に社会の中で一定の地位や役割を持っており、その責任を果たすことが大切です。最早人生の折り返し点を過ぎており、後戻りすることも出来ませんし、未来への選択肢もそれ程多くありません。老人になると残された人生の時間は長くありませんし、現役を引退しているので、思いはどうしても自分が若く元気であり、楽しい人生を送っていたころの思い出に向かいます。老人が家族や知人に同じ過去の思い出話を繰り返し、繰り返し語り続けることもしばしば見られます。しかし、最近、私は自分自身が老年期に近づくにつれて、青年期・壮年期・老年期についてのこのような固定的イメージは改めなければならぬと感じるようになりました。先日、何気なく点けていたBS放送の番組に聖路加国際病院名誉院長の日野原重明さんが出て来て、女性のアナウンサーのインタビュウを受けていました。日野原さんは一〇三才の内科医であり、ご高齢でも非常に元気で執筆や講演活動に忙しくしている方です。この時もインタビュウの言葉に非常に的確に答えていました。その中で、アナウンサーが、「年をとっても何時までも若々しさを保つ秘訣は何ですか」という質問をすると、規則正しい生活をして健康を保つことや、何か生きがいを持つことその他に、

若い人たちと交わることや、何か自分がやったことのないことに挑戦することだと答えています。一〇〇才を超えた人が新しいことを試みる気持ちを持つていることに驚いたのですが、日野原さんは実際のところ、最近作曲や指揮をしたり、若者達が利用するフェイスブックを試みているそうです。確かに、年を取っても自分の知らないことや体験したことがないことは沢山あります。世界は未知と不思議に満ちています。どんな些細なことでも良いのですが、新しいことを発見したり、新しいことを試みてみるからこそが、どの年代の人間にとっても精神の健康と若さを保つ秘訣であると言いうことが出来ます。

さて、今日の聖書はイスラエルの父祖アブラハムの新しい旅、新しい人世の冒険について語っている箇所です。アブラハムの先祖は元々メソポタミア下流の古代都市ウルの辺りに住んでいましたが、父親のテラの時代に、上流のハランに移住していました（創一一・二七—三三）。このハランにいるときに、アブラハムに神の言葉が臨んで、神が指し示す約束の地に旅立つように促しました。その時、アブラハムは七五歳の老人でありましたが、神の言葉に従い、一族郎党を引き連れ、全財産を携え、カナン（つまり、後のイスラエル）の地に向かってやって来ましたが（創一二・一—九）。考古学者によれば、その頃のオリエントの人々の平均寿命は四十才以下だったという事なので、当時のアブラハムは平均寿命を三十才以上超えた老人であったということにな

ります。そのような高齢の人物に神は約束の地を示して旅立つように促したのです。アブラハムはもとより高齢の身ですので、あと何年生きるか分かりませんし、この時は息子のイサクも生まれていません。人間的には全く見通しがないままに、神の言葉だけを頼りに、人生の新しい旅立ちを行ったのです。

それは、紀元前一八〇〇年位の気の遠くなるような昔のことですが、実はイスラエルの民族の始まりを示す出来事でした。アブラハムが神の言葉を信じて従うということがなければ、イスラエルの地にユダヤ人が住むこともありませんでしたし、「アブラハムの神・イサクの神・ヤコブの神」と呼ばれるような、神とイスラエル民族との特別な関係が生まれることもありませんでした。アブラハムにとり、ハランという土地は父親の時代から住んでいる慣れ親しんだ土地であり、そこには自分の現在の生活の基盤があり、頼りに出来る親族も沢山住んでいました。それに対して、約束の地を得ることは未来の可能性にしか過ぎませんでした。しかし、アブラハムは神の言葉の故に、現在の生活よりも未来の可能性の方に賭けて旅立ったのであります。カナンの地にやって来たアブラハムに、「あなたの子孫にこの地を与えよう」という神の言葉が臨みますが（創一二・七）、この約束が実現するのは五百年位経ってからで、アブラハムとその子孫はカナンの地では寄留の遊牧民として先住民族の間に家畜を追って暮らしていました。ヘブライ人の手紙は、

このアブラハムは約束をした神が真実な方であると信じ続け、希望を持って一生を送ったと語っています（ヘブリー・八―一六）。未来へ希望を持つためには、その希望の根拠ということが問題になります。アブラハムは未来の希望の根拠を、真実な神の言葉に置き、その希望は失望には終わらず、実現したことを聖書は語っています。皆さんが聖書の言葉の中に、将来の人生の確かな礎を見出し、希望が与えられることを望みます。

「考え直して信じる人生」

大学宗教授任 出村 みや子

マタイによる福音書二一章二八～三二章

28 「ところで、あなたたちはどう思うか。ある人に息子が二人いたが、彼は兄のところへ行き、『子よ、今日、ぶどう園へ行つて働きなさい』と言った。29 兄は『いやです』と答えたが、後で考え直して出かけた。30 弟のところへも行つて、同じことを言つと、弟は『お父さん、承知しました』と答えたが、出かけなかった。31 この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか。」彼らが「兄の方です」と言つと、イエスは言われた。「はつきり言つておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう。32 なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった。」

本日選びました聖書箇所は、他の福音書には並行した記事のない、マタイ福音書だけの独自の記事です。父親と二人の息子の物語ということで言えば、ルカによる福音書にある有名な放蕩息子の譬えを思い起こす方もいらっしやるでしょう。今ご一緒に歌った讚美歌二四三番には、金持ちであったがゆえに主イエスの招きに従いえなかった青年、イエスが捕えられた後に三度そんな人は知らないと否認したペトロ、イエスの復活に際して、その手に釘跡を見、この指を釘跡に入らなければ信じないと言った疑うトマストマスの三人のことが歌われておりますが、主イエスはこれら三人三様のイエスに対する否定的態度にもかかわらず、なおも彼らを神の国へと招いていることが示されています。そこで本日はマタイ福音書の「二人の息子の譬え」を通して、キリスト教の中心的メッセージの一つであるイエスの招きについて、ひと時ご一緒に考えたいと思います。

マタイ福音書のテキストをご覧ください。冒頭でイエスは「ところで、あなたたちはどう思うか」と問いかけています。ここで「あなたたち」と呼びかけられているのは、その直前の二三節でイエスの権威について問答をしている祭司長、長老たちといったユダヤ教の指導者たちを指していることがわかります。イエスは彼らに向かってこの譬えを語っておられます。譬え話には父親と二人の息子が登場します。父親はその兄の方に向かって「子よ、今日、ぶどう園へ行つて働きなさい」と言いましたが、彼は「いやです」と答えました。しかし、後になって考え直して結局は

ぶどう園に出かけていきました。父親が弟の方にも同じことを言うと、彼は「お父さん、承知しました」と大変よい返事をしたもの、実際には出かけては行きませんでした。この二人の兄弟の話、みなさんもこれまでの人生の中で自他ともに何らか思い当たる経験をしたことはないでしょうか。「必ず行きます」と返事をしたにもかかわらず、後に行くことができなくなってしまうた自分の苦い経験や、来てくれないと思っていた人が、予想に反して来てくれたうれしい経験等、人生には予想外の、自分でも思ってもみないような他者との関わりが様々な形で生じるものです。イエスはこのような譬え話をしてから、彼らユダヤ教の指導者に対して「この二人のうち、どちらが父親の望みどおりにしたか」と尋ねられたのです。彼らはそれに対して「兄の方です」と答えています。

兄は父親の意思に対して一度は「いやです」と言っただけを拒否しましたが、しかし後になって「考え直して」その意思に従いました。しかし、弟は「お父さん、承知しました」と言いながら実際には父親の意思に従いませんでした。そのどちらが父親の望みどおりにしたのか、という問いに対して彼らユダヤ教の指導者たちは兄の方だと答えています。譬え話のなかの兄とは一体誰のことを指しているのでしょうか、また弟とは一体誰のことを指しているのでしょうか。それを知る手掛かりが、それに続くイエスの言葉に見出されます。

三一節の後半以下をご覧ください。主イエスは、「はつきり言っておく。徴税人や娼婦たちの方が、あなたたちより先に神の国に入るだろう」と述べた後に、その理由として「なぜなら、ヨハネが来て義の道を示したのに、あなたたちは彼を信ぜず、徴税人や娼婦たちは信じたからだ。あなたたちはそれを見ても、後で考え直して彼を信じようとしなかった」と告げています。

イエスがこのように「はつきり言っておく」というような言い方をされるときには大変大切なことが告げられる時です。ですからこれに先立つ譬え話は、いわば次のことが告げられる布石となつていなのです。その一番のポイントは「考え直して信じる」ということにあるように思われます。先の讚美歌にも歌われていたように、人生の歩みのなかで、罪と弱さを抱えたわたしたち人間が自他ともに予想外の行動をとり、神の意思に背くことはありがちなことです。しかし、後になつて考え直して、神に立ち返る歩みをすることがどんなに大切なことか、そのことを主イエスはわたしたちに告げているのです。

ここに出てくる徴税人は税金を取り立てる仕事をしてた役人のことですが、当時のユダヤ教の文脈では、神を信じない異邦人であったローマ人に雇われ、同胞から税を取り立てるのは宗教的に汚れた、神に背く行為とみなされてきました。また娼婦は「姦淫をしてはならない」というモーセの十戒に背く職業とみなされてきました。ところがそのような人々の方が、神の意思に従つて

正しい生き方をしていると自認していた当時の宗教的指導者たちよりも先に神の国に入るだろう、とイエスは言っておられます。これを聞いた当時の人々は皆驚いたに違いありません。イエスの意図はどこにあるのでしょうか。

イエスはここで、徴税人や娼婦たちは確かに一度は神の戒めに背いたかもしれないが、しかしイエスの先駆者として登場した洗礼者ヨハネが来て、義の道、つまり神に従う正しい道を示した時に、考え直して、それに従ったではないか。それに対してユダヤ教の指導者たちは、洗礼者ヨハネの言葉を信じようとはしなかったではないかと告げています。この譬え話で弟に当たるのは、つまり初めは信じているような振る舞いをしていて、結局は信じていなかった者とは、イエスとここで問答をしている祭司長や長老といった当時のユダヤ教の指導者のことを指しています。また、兄に当たるのは、つまり初めは信じていないように見えたが、後になって考え直して信じた者とは、当時のユダヤ社会の中で差別されていた徴税人や娼婦たちのことです。ここには、これに先立つ一九章の金持ちの青年の譬え話の結びの句（一九章三〇節）や、二〇章のぶどう園の労働者の譬えの結びの句にも出てくる「このように後にいる者が先になり、先にいる者が後になる」（二〇章一六節）という、いわば運命の逆転のメッセージが鮮やかに示されています。

イエスのこの譬えから、わたしたちは一度判断を誤ったり、あるいは道を踏み外してしまった

時でさえも、考え直して神に立ち返る人生の可能性がここに示されていることを覚えたいと思います。なぜなら、イエスの十字架上の死と復活の後、キリスト教宣教の担い手となったのは、人間の弱さと罪にもかかわらず、神の愛と憐みによつて、みもとに立ち返ったペトロをはじめとするあの弟子たちであつたからなのです。

「悔いることを感謝する」

大学宗教主任 村上みか

ヨハネの手紙一 四章七〜一二節

7 愛する者たち、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。8 愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。9 神は、独り子を世にお遣わしになりました。その方によって、わたしたちが生きるようになるためです。ここに、神の愛がわたしたちの内に示されました。10 わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして、御子をお遣わしになりました。ここに愛があります。11 愛する者たち、神がこのようにわたしたちを愛されたのですから、わたしたちも互いに愛し合うべきです。12 いまだかつて神を見た者はいません。わたしたちが互いに愛し合うならば、神はわたしたちの内にとどまってくださり、神の愛がわたしたちの内です。

十二月二十五日が近づき、クリスマスの飾りつけや贈り物の品々で、辺りは明るくにぎやかです。キリスト教の伝統が浅く、クリスチャンの少ない日本でも、クリスマスの行事は生活の中に定着したようで、温かく楽しい、幸せなひとときを、多くの人が楽しみにしているようです。たしかに、聖書でもイエスの誕生は牧歌的で柔らかな調子で描かれ、それが救いや平和をもたらす喜ばしい出来事であると記されています。しかし、よく読むと、この救いや平和は「罪の赦し」によつてもたらされるものであると記されています。マタイやルカの福音書でも、イエスの誕生は、人の「罪を赦し」、それによつて人を救い、そうして人を平和の道へ導くものであると語られています。冒頭に記したヨハネの手紙でも、九一〇節において、イエスがこの世に遣わされたのは、私たちの罪を償い、私たちが生きるようになるためであつたと、述べられています。

この「罪」という言葉、日本人にとっては理解が難しい言葉だといわれています。しかしこのヨハネの手紙を読むと、少し理解できるかもしれません。「愛する者たち、互いに愛し合ひましよう。愛は神から出るもので、愛する者は皆、神から生まれ、神を知っているからです。愛することのない者は神を知りません。神は愛だからです。」…ここでは、本当の愛というのは神から出るものであつて、人間から出るものでないことが示されています。私たちが一般に愛と呼ぶものは、私たちの中から発する愛、つまり自己の思いから発する愛だと言えるでしょう。この私たちの中

から発する愛というのは、私たちの心を温かくしたり、わくわくする思いをわたしたちに与えたり、ある意味、魅力的なものです。昔から詩や歌でこの愛について語られてきました。しかし自分の中から発する愛は、相手を愛することによって、自分もまた愛されたいと願う見返りを期待するものであったり、あるいは相手を思いやろうとしても、いろいろな思いが邪魔をして、十分に思いやれない、十分に愛せないという限界をもつものです。自分から発する愛というのは、結局は自己愛であると言えるでしょう。そう考えると、真実の愛、無限の愛というものは、残念ながら人間には期待できないものかもしれません。ちよつと調子がよく、余裕のあるときに優しくすることが出来る程度では、本当に愛したことはない、そのような人間の愛の現実についてヨハネの手紙は考えさせてくれます。

しかし、このような自己の限界を知り、自信をもつことのできなくなつた人間に、聖書は救いの言葉をもたらすのです。わたしたちは、このように不十分な存在でありながら、それにも関わらず、生きるようにされている、貧しく弱い存在でありながら、それを赦され、つねにあるべきところへ立ち帰ることが赦されている、と告げられるのです。それを最も明確な仕方であげたのがイエスでした。彼は、「神を愛し、隣人を愛する」ことを教えました。同時に彼は、「愛されていること」を教えました。この貧しさ、愚かさにも関わらず、人は受け入れられ、赦され、生きるよ

うにされているということ、これがイエスの、そしてクリスマススの重要なメッセージであるのです。そして赦されていることを知った人間は、自然に他者へと出て行き、自分もまた愛を実現することが可能になるのです。愛され、生きるようにされた人が、また他者を愛し、平和をもたらす存在になるということであるのです。

明治の初期、長く続いたキリスト教の禁止政策が解かれ、キリスト教が少しずつ日本の社会の中に広められてゆきました。当時の日本は一般的にキリスト教に好意的ではありませんでした。宣教師たちの働きにより、キリスト者となる人々が徐々に増えてゆきました。宣教師やキリスト教育家たちは、官立の学校で英語や西洋の学問を教え、あるいはキリスト教の学校を設立して、そこで教える中で、若者たちを感化し、その中でキリスト者が育てられていったのです。その多くは佐幕派出身の士族でした。彼らは明治維新によつて社会的、経済的地位を喪失し、薩長出身者たちのように将来の地位を保証されず、そのような苦境の中にあつて、彼らは西洋の学問を志し、学校に入り、宣教師たちに出会つてキリスト者となつたのです。その際、彼らをまず感化したのは、キリスト教の倫理であつたといわれています。隣人愛や奉仕の精神、また節制といった生活の規律を自らに厳しく課し、身をもつてこれを実践する宣教師たちの姿に彼らは動かされたとい

われます。武士道と通じる所があつたのかもしれませんが。しかし、キリスト教の教える「人間の罪」はなかなか理解されなかつたと言われます。当時の宣教師の記録にはこのように記されています。「日本人は気軽な人民である。災難などに遭遇することがあつても、長くこれを恐れることはない。宗教においても、正直に信仰するが、今日までの経験からすると、罪惡のために深く悲しむのを見たことは少ない。」

しかし、その中で人々は少しずつキリスト教の深い理解へと導かれていったようです。内村鑑三もその一人でした。彼も最初はキリスト教の道徳に感銘を受けてクリスチャンになり、自らもそうあるべく理想の実現のために努力し、活動していました。しかし札幌農学校を卒業して、社会に出た後は、教育勅語への不敬事件で第一高等中学校の職を追われ、また結婚にも失敗するという様々な困難を経験します。その中で彼の理想は崩れ、彼は自己の独善や欺瞞を考えるようになったといえます。そして聖書の言う罪の赦しということが、ようやくわかるようになったといえます。彼はこのように書いています。「私は心のみすぼらしさを真に恥じる。神の御前で純潔な人となることは、私にとつては不可能である。しかし神に感謝する。私は『キリスト』にあつて罪を悔いる罪人であることが出来るのである。」

自らのみすぼらしさを知り、それを悲しみ、悔いることを、イエスによつて教えられた、そし

てそのことを感謝する、と彼は言います。そのように感じることできた彼は、クリスマスを本当に喜んで迎えたことでしょう。讚美歌一四番の歌詞にあるように、疲れ、悲しむ者が守られ、重荷を負い、悩める人が慰められ、強められて、再び生かされることへの感謝を歌う、このような深い恵みに満ちたクリスマスを、私たちも迎えたいと願います。

〈喜び〉を探し求めること

大学宗教授主任 原 田 浩 司

フィリピの信徒への手紙第四章四～七節

4 主しゅにおいて常に喜びよろこびなさい。重ねて言いいます。喜びよろこびなさい。5 あなたがたの広い心こころがすべての人ひとに知られるようになりなさい。主しゅはすぐ近くちかにおられます。6 どんなことでも、思おもい煩わづらうのはやめなさい。何事なにごとにつけ、感謝かんしゃを込こめて祈いのりと願ねがいをささげ、求もとめているものを神かみに打ち明あけなさい。7 そうすれば、あらゆる人知じんちを超こえる神かみの平和へいわが、あなたがたの心こころと考かんがえとをキリスト・イエスによって守まもるでしょう。

「主しゅにおいて常に喜びよろこびなさい。重ねて言いいます。喜びよろこびなさい」。日本語に訳すと「喜びなさい」という命令口調になってしまうのが多少残念な気がしますが、英語では「Rejoice! リジヨイス」、どちらかと言えば「喜ばうよ」と相手にも喜びを促すニュアンスだと思えます。「さあ、共に喜ばう」。今日の聖書の言葉は、聴き手に喜びを促しています。

さて、今年（二〇一四年）は、児童文学『赤毛のアン』を翻訳するなど、数々の児童文学を日本に紹介した作家・翻訳家、村岡花子さんの生涯を描いたNHKの朝の連続ドラマ小説「花子とアン」が話題になりました。皆さんの中にも「赤毛のアン」を知っている、とか読んだという人もいるでしょう。では、村岡花子さんが翻訳した『少女パレアナ』という児童文学はご存知でしょうか？「赤毛のアン」なら聞き覚えはあるけど、「少女パレアナ」は聞いたことがない、という人は多いかもしれません。今からもう約30年前の一九八六年に、日本では「愛少女ポリアンナ物語」というタイトルで、一年間、TVアニメーションとして放送されました。この作品も、実は世界的によく知られる、20世紀を代表するアメリカ児童文学の一つです。知らなかったという人は、文庫本で出ていますので、是非読んでみて欲しいと思います。

少し、この物語に触れますが、主人公がパレアナで、彼女の母は、もともと由緒ある良家の娘でしたが、家族全員の反対を押し切って、駆け落ち同然で、貧しい青年牧師と結婚しました。そしてこの結婚を機に、家族とはまったくの絶縁状態になってしまいます。結婚した二人の間に生まれた娘が、主人公のパレアナです。しかし、パレアナが生まれて数年の間に、母が、父が、という具合に、相次いで病に侵され、亡くなってしまふのです。一人っ子で、どこにも身寄りのないパレアナは、亡き母の妹である「叔母」に引き取られることとなりますが、その叔母の屋敷では、

最も粗末なみすばらしい屋根裏部屋があてがわれました。要するに、歓迎されていないことは明白でした。しかし、パレアナはそれでも、いつも明るく振る舞います。そんなパレアナの明るさやユーモアに影響を受け、大変気難しい性格の叔母をはじめ、周りの皆が次第次第に変わっていく…。これが大まかな物語の流れです。

さて、この物語になぜ触れたのか。それは今日の聖書の言葉と関係しているからです。主人公の少女パレアナはどんな苦境や逆境の中でも、ある秘訣で、自らの明るさを保ち、心の優しさと平安を取り戻していきます。その「ある秘訣」というのは、牧師だったお父さんから常々教えられた「喜びの遊び（よかった探し）」と名付けられたゲームでした。このゲームは何であっても、どんな時にも、そこに何か「喜び」を見つけ出すというゲームで、物語の中で、パレアナはこのゲームをこう説明しています。「ええ、『なんでも喜ぶ』ゲームなの。…分かるじゃないの、ゲームはね、何でも喜ぶことなのよ。喜ぶことを、何の中からでも探すのよ。なんであってもね」。パレアナは、どんなに悲しいことや辛いことがあっても、父から教えられたこのゲームを思い出し、どんなことの中にも喜びを見つけ出すとする。すると、よかったこと、喜びを見つけては、明るさをとりもどしていきます。パレアナが友達に教えたこのゲームは、彼女が住む町全体にどんどんどんどん広がっていき、人々が喜びをさがしては、明るさを取り戻し、少しずつ変えられていきます。

ある人から見れば、この物語は子供向けのうまい話、うまい寓話にすぎない、この世の現実はもっと厳しく、そんなゲームごときで、自分が置かれた厳しい現実を変えられるわけではない。そんな風に考えるかもしれません。しかし、この物語は、何か物事の見方を変えれば、状況を変えることができるといった処世訓を、子どもたちに語り聞かせようとしているではありません。辛くて悲しいけれど、少し見方を変えれば、その痛みが和らぐ、と教えているのでもありません。厳しい現実の中でもなお、喜びを見ることができるようになる、どんなに辛いことや悲しいことの中からも、そこにどっふりと埋もれることなく、喜びを見つけ出すことができる根拠があるのだ、と伝えているのです。

この物語は、明らかに、フィリピの信徒への手紙のパウロの言葉が下敷きになっています。パウロは「主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい」と繰り返し語ります。当然のことですが、わたしたちは「喜びなさい」と言われて、すんなり「はい」と言って喜べるわけではありません。しかし、よかったことを探す、喜びを見つける、という視線、姿勢は、一人ひとりの生き方を、内面を変えていきます。「花子とアン」の主題歌になった絢香さんの曲「にじいろ」の歌詞に「なくしたものを数えて瞳閉ざすよりも、あるものを数えた方が瞳輝きだす」というフレーズがあります。失ったものを数え、悲しみを数え、苦しみを数えるよりも、そのような中にも、

あるいは、それでもなお、よかったことを探す、喜びを数え、喜びを探す。そこには人間を輝かせる強さがあります。

さらに、パウロは「喜びなさい」と言いますが、その喜びの原因、喜ぶ根拠が果たして何なのか。パウロはそのことを繰り返して、重ね合わせてこう言っていました。「主において常に喜びなさい」。悲しみの中にも、あるいは苦しみの中にも、主なる神があなたと共に、私と共に寄り添っている。必ず神がそのような暗闇と考えるような中にも、わたしと共に、あなたと共にいてくださる。神が必ずそこにもいてくれる。聖書はそのことに気付くことが、大きな力になることを、わたしたちに伝えます。

「小さな群れ」

総合人文学科長 北 博

申命記七章六〜八節

6 あなたは、あなたの神、主の聖なる民である。あなたの神、主は地の面にいるすべての民の中からあなたを選び、御自分の宝の民とされた。7 主が心引かれてあなたたちを選ばれたのは、あなたたちが他のどの民よりも数が多かったからではない。あなたたちは他のどの民よりも貧弱であった。8 ただ、あなたに對する主の愛のゆえに、あなたたちの先祖に誓われた誓いを守られたゆえに、主は力ある御手をもってあなたたちを導き出し、エジプトの王、ファラオが支配する奴隸の家から救い出されたのである。

ルカによる福音書一二章三二節

32 小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。

申命記は、ヨルダン川東岸のモアブ地方でモーセが神から告げられたことをイスラエルの民に語る、という形式になっています。今日お読みしました七章六節以下も同様です。ここでイスラエルの民は、「主の聖なる民」また「宝の民」と呼ばれています。それは神である主があなたを「選び」、ご自分のものとされたからだ、としています。続く七節でも主が「選んだ」ことが繰り返し強調されます。そして、それはあなたたちが他のどの民よりも大きかったからではない、それどころかあなたたちは、他のどの民よりも貧弱だったのだ、と続きます。そして八節で、エジプトの奴隷状態から主がイスラエルの民を救い出した出来事が想起されます。

この申命記の個所と似た言葉が出て来るのは、出エジプト記一九章三一六節です。こちらは、モーセがシナイ山に登って行くと神が彼に語りかけた、という場面です。神はモーセに、民に向かつてこう告げよ、あなたたちは私の「宝」となり、私にとって「祭司の王国」「聖なる国民」となる、と言います。

祭司は、神に近づき得る人間です。それまでエジプトの底辺で隷属状態に置かれ、神から遠い存在と見なされていたイスラエルの民が、「祭司の王国」と宣言されることによって、等しく神と結びついた存在となった、ということです。また、「聖」とは分離を暗示する言葉です。それまで

受動的に属していた集団から取り分けられ、それまで不本意ながら受容していた奴隷としての生き方を意識的に断ち切り、主の「聖なる国民」として新たな主体的関係性の構築を目指す共同体となった、ということです。ここでは申命記七章で強調されていた「選び」という言葉はありませんが、やはり主の「選び」が暗示されている、と考えるべきでしょう。

続く出エジプト記二〇章では、神である主が、自分は「あなたをエジプトの国、奴隷の家から導き出した神」であると自己紹介した上で、わたし以外の何者をも神としてはならない、また如何なる像にも仕えてはいけない、と語りかけます。ここでは、エジプトの隷属状態の中でファラオを神としてそれに仕え、その像に向かってひれ伏すことを余儀なくされていたことが暗示されます。そして五節において、神である主は、「わたしは熱情の神である」と宣言します。「熱情」とは神の人間への限らない優しさ、熱愛であり、啓示の源泉、神の人間への神秘的な関わりを表現です。神の熱情に触れた時、人間は本当の意味において神の似姿となり、意志的かつ主体的な新しい生き方に目覚めるのです。

私は若い頃何度か、岩手県の奥中山高原にある「カナンの園」の「小さき群れの里」という施設に、教会の人達と一緒にいたり、ある時は一人で訪ねたりもしました。その施設では、障がいを持った青年達が職員の皆さんの助けや付近の方々の応援を受けながら、共同生活を営んでいたのです。

私が感動したのは、青年達がそれぞれ弱さを抱えながら、それを隠そうとするのではなく、お互いにその弱さをさらけ出し、認め合いながら、励まし合って生きているように見えたことです。健全者とは弱さを隠し通せる人間のことではないか、とその時は思いました。でもそうやって見栄を張り、強がって競争し合う生き方が本当に人間らしいと言える生き方なのだろうか、それは単に「お金」「地位」「名誉」といった価値観の奴隷となつて、ひたすらそれらに仕えているだけではないだろうか、そう私は思いました。それほど、その施設の青年達はありのままの自然体で生きているように見えたのです。

「小さき群れの里」のホールには、次の聖書の言葉が書かれた垂れ幕が飾られていました。「恐れるな、小さな群れよ。御国を下さることは、あなた方の父のみこころなのである。」

前の口語訳なので、新共同訳とは少し違いますが、ルカによる福音書二二章三二節からの引用です。初めて行った時にこれを見て感動した私は、次に行く前にこれにメロディーをつけて歌にしてみました。

主の選びとは、このようなことを言うのではないのでしょうか。神の選びの民、選ばれし人とは、このような人々のことを言うのではないのでしょうか。そこに主がきつと居て下さると確信できる場、正に今ここに主がいて、私の傍らに立っていて下さることを実感出来る場、これこそが本当

のシャローム、主の平和なのではないでしょうか。

主の恵みは最も弱いところに働かれます。自分の弱さを認め、それを主に託そうとする者達を、主は決してお見捨てにはなりません。私達は、弱さを携えて主にすがるとき、既に主選ばれているのです。このことを忘れ、私達の強さ、才能や能力、強い性格、そして強い信仰を誇る時、主は既に私達の許を去ってしまっているのではないのでしょうか。そのような誤解をしないよう、驕らず高ぶらず、常に自然体で、弱さの原点に立ち返って生きたいものだと思います。

sister. A friend once spoke of seeing Charles and Mary, brother and sister, walking across the field to the mental asylum, while both of their faces were bathed in tears. Is this a sad story? Yes, it is. However, it is also a story that gives us a clear and powerful example of the sacrificial love about which Jesus spoke so often. I pray that each of us will hear these words from our Savior and follow his example today.

When I become hungry, I get something to eat. If I am cold, I put on some warm clothes. But Jesus says this is only part of my responsibility. Jesus says that, as a Christian, if my enemies are hungry I must give them food, too; and if they are cold, I must also give them warm clothes that they can wear. In fact, it might be helpful to think about it this way; when I eat for myself, it should remind me that I should also give food to people who don't have food to eat. And when I am cold, it should remind me to give clothes to people who don't have clothes to keep them warm. Jesus tells me that even if those people are my enemies, I should take care of them just like I take care of myself.

The kind of love Jesus was talking about is not the kind of love about which we usually think. It is not the love of friends who are easy to love. Rather, it is love that involves sacrifice on our part. It is love which expects nothing in return. This was the kind of love the great English writer Charles Lamb showed in his life. You see, Lamb was planning to marry the girl he loved. However, he sacrificially gave up those plans in order to care for his sick sister, Mary, who suffered from mental derangement. One time, Mary, in one of her deranged fits, stabbed her mother to death. After this, Charles realized that Mary would need special care for the rest of her life. For this reason, Charles gave up his plans to marry the girl he loved, and for 38 years, he cared lovingly and tenderly for his sick

22. The lawyer asked Jesus, “Which of the Old Testament commandments is the greatest?” Jesus chose not to answer the question directly. Instead, he spoke to the lawyer about two additional but short commandments that summarized all the Old Testament commandments. The first of these short commandments was, “Love the Lord your God with all your heart, and with all your soul, and with all your mind.” The second commandment was, “Love your neighbor as yourself.” Jesus explained that all the Old Testament writings were based on these two, short, easy-to-understand commandments.

On another occasion, Jesus further explained the kind of love he was talking about with the lawyer. As recorded in the fifth chapter of Matthew, Jesus said, “Love your enemies, and pray for those who persecute you, so that you may be sons of your Father who is in heaven; for he makes his sun rise on the evil and on the good, and sends rain on the just and on the unjust. For if you love those who love you, what reward have you? Do not even the tax collectors do the same? And if you salute only your brethren, what more are you doing than others? Do not even the Gentiles do the same? You, therefore, must be perfect, as your heavenly Father is perfect.”

In short, Jesus said that if we truly want to follow him, we must also do for others what we naturally do for ourselves. And especially, we must do these things for our enemies. For example, I do not have any problem taking care of myself.

The Good Samaritan

文学部教授 David Murchie (マーチー デイビッド)

SCRIPTURE READING: *Matthew* 5: 43-45 (マタイによる福音書第5章43～45節)

43 “You have heard that it was said, ‘Love your neighbor and hate your enemy.’ 44 But I tell you: Love your enemies and pray for those who persecute you, 45 that you may be sons of your Father in heaven. He causes his sun to rise on the evil and the good, and sends rain on the righteous and the unrighteous.”

(訳)

43 「あなたがたも聞いているとおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。44 しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。45 あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。

MESSAGE: “The Good Samaritan”

A lawyer once came to see Jesus. He had a question he thought Jesus would not be able to answer. The story is recorded in the New Testament *Gospel of Matthew*, chapter

「徴税人ザアカイ」

経営学部教授 松村尚彦

ルカによる福音書一九章一〜十節

1 イエスはエリコに入り、町を通つておられた。2 そこにザアカイという人がいた。この人は徴税人の頭で、金持ちであつた。3 イエスがどんな人か見ようとしたが、背が低かつたので、群衆に遮られて見ることができなかつた。4 それで、イエスを見るために、走つて先回りし、いちじく桑の木に登つた。そこを通り過ぎようとしておられたからである。5 イエスはその場所に来ると、上を見上げて言われた。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい。」6 ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた。7 これを見た人たちは皆つぶやいた。「あの人は罪深い男のところに行つて宿をとつた。」8 しかし、ザアカイは立ち上がつて、主に言つた。「主よ、わたしは財産の半分を負しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取つていたら、それを四倍にして返します。」9 イエスは言われた。「今日、救いがこの家を訪れた。この人もアブラハムの子なのだから。」

10 人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである。」

人の心は本当に不思議なものだと思います。たとえば、すごく気持ちが悪く落ち込んでいるときでも、たまたま人から声を掛けてもらっただけで、あるいはメールをもらっただけで、あるいは以前にちょっとした喧嘩をした人が、いつもと変わりなく笑顔で挨拶してくれただけで、それだけで嬉しくなったり何時の間にか元気になったりします。そんな時には、人ってありがたい、人の心は人によって元気にされるのだなあと思わされます。

しかし私たちは、人の助けが欲しいときに、いつでも人の助けが得られる訳ではありません。人との関わりは、私たちが元気にしてくれるものでもありますが、時に私たちは、人との関わりによって傷つけられ、とつても深い孤独の闇へと突き落とされてしまうこともあります。それは本当につらいものです。

実は、今日の聖書の箇所に出てきたザアカイという人も、そうした孤独に長い間苦しみ続けてきた人だったのではないかと思います。というのは、ザアカイは、徴税人というユダヤ人から大変嫌われていた仕事をしていただけだからです。

この仕事は、ユダヤ人にとっては敵国であるローマ帝国のために、ユダヤの同胞から税金を取

り立てる、しかもある時は脅したり、またある時はずるがしこいやり方で税金を取り立てるので、ユダヤ人からは非常に忌み嫌われ、また蔑まれていました。

ザアカイは、自分を蔑む人々を見返してやりたいと思ったからでしょうか、一生懸命努力して、徴税人の中でも最も偉い、徴税人の頭にまでなり、沢山のお金を持っていました。

そんな彼が、あるとき、どうしてもイエスをひと目見たくなったというのです。でも一体なぜザアカイは、それほどまでにイエスを見たいと思ったのでしょうか。彼はイエスを見ることによつて、何を期待していたのでしょうか。残念ながら、そのことについて聖書は何も語っていません。ただ物語全体を通して考えてみると、私には、ザアカイの心の苦しみが透けて見えてくるように感じられます。それはお金を持つていて「裕福」ではあるけれども、決して「幸福」ではない彼の心の苦しみです。自分を仲間はずれにして、蔑む人々に対する怒りや憎しみ、自分の気持ちを分かち合う人がいない寂しさ、そんな思いに苦しめられてきたのではないかと思うのです。

そしてこのつらい思いは、彼が何をしているときにも、何処にいるときにも、ついてまわるものなので、そこからどうにかして抜け出したい、救われたい、そう願っていたに違いありません。イエスは、木の上にかけ登ったザアカイのそうした心の内側を見抜いて、沢山の群集がいる中で、ザアカイだけに特別に、彼の名前を呼んで話しかけられます。すると次の瞬間、ザアカイの口から、

次のような思いもよらない言葉が語られました。

「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施します。また、だれかから何かだまし取っていたら、それを4倍にして返します。」と。

つまり「生き方を変えます」と言うのです。「自分を蔑んできた人たちを見返してやるための人生」から「人々と共に分かち合いながら生きる人生」へと生き方を変えようというのです。自分が怒りと憎しみを感じ、心の中で切り離してしまっていた人々、その人々との交わりの中に再び帰っていくというのです。これは大変勇気のいる決断です。ザアカイ自身にとっても、自分が語った言葉だとはいえ、思いがけない意外な言葉にビックリしたに違いありません。

このように彼は、イエスとの出会いによって、その愛に触れることによって、人を拒絶する生き方から、人とのつながりの中で生きていく生き方へと方向転換をしたのです。それは人が本来の人として回復をした、決定的に重要な瞬間でした。だからこそイエスは、それを見て「今日、救いがこの家を訪れた。」と行って共に喜びます。

そして最後に、イエスは、今度はザアカイだけでなく、私たちにもむけて、こう語りかけます。「人の子は、失われたものを探して救うためにきたのである。」

「失われたもの」、すなわちザアカイのように心に悩みを持ち、どうにかして生き方を変えたい

と願っている私たち一人一人を、でもどうしたら良いか分からないで迷っている私たち一人一人を、イエスの方から探し出して救おうとされているということです。

キリスト者とは、そのことを信じて生きるものだけということができるでしょう。

「一枝のぶどう」

工学部教授 星宮 務

マタイによる福音書 二六章二六―三〇節

26 一同が食事をしているとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱えて、それを裂き、弟子たちに与えながら言われた。「取って食べなさい。これはわたしの体である。27 また、杯を取り、感謝の祈りを唱え、彼らに渡して言われた。「皆、この杯から飲みなさい。28 これは罪が赦されるように、多くの人のために流されるわたしの血、契約の血である。29 言っておくが、わたしの父の国でああなたがたと共に新たに飲むその日まで、今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。30 一同は賛美の歌をうたつてから、オリブ山へ出かけた。」

ヨハネによる福音書 一五章一―五節

1 「わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。2 わたしにつながっていない

がら、実を結ばない枝はみな、父が取り除かれる。しかし、実を結ぶものはみな、いよいよ豊かに実を結ぶように手入れをなさる。³わたしの話した言葉によって、あなたがたは既に清くなっている。⁴わたしにつながっていないさい。わたしもあなたがたにつながっている。ぶどうの枝が、木につながっていないければ、自分では実を結ぶことができないように、あなたがたも、わたしにつながっていないければ、実を結ぶことができない。⁵わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである。

本日の礼拝では2箇所、の聖書をお読みしました。初めの箇所は、イエス・キリストが「最後の晩餐」の時に弟子たちと共に食卓につき、回しながらパンを食べ、ぶどう酒を飲んでいる箇所です。ここでイエスはパンを「わたしの体」、ぶどう酒を「私の血」とたとえています。

パンとぶどう酒とは、西洋の世界では生きるために必要な食べ物であり、何かを祝ったりすることを記念する飲み物で、欠かせないものがあります。勿論イエスが「体と血」と表現したのは、この食事会のすぐ後につかまって、やがて十字架につけられ、殺されることを予感した表現になっ

ています。因みに、私たちの手元にある聖書が「旧約聖書」、「新約聖書」と呼ばれるのは、それぞれモーセの十戒による神の契約と、イエス・キリストによる新しい契約とを意味しております。キリスト教の教会でクリスマスやイースターなどの記念日には必ず「聖餐式」が行われるので、ぶどう酒が不可欠になります。もう20年くらい前、私は家族と一緒にアメリカのカリフォルニア州の大学に1年間在外研究で留学する機会を得ました。カリフォルニア州の南側には、メキシコ国境から北隣のオレゴン州に向かって「エル・カミーノ」（スペイン語で「真理への道」）と呼ばれる道路があります。ヨーロッパからスペイン人たちが新大陸に上陸した後、南から北へこの道路を作り、道に沿って何箇所もの教会をたて、そのそばに聖餐式に使うためにぶどう園を作り、ワインを作りました。それがナパとかソノマなどの現在のカリフォルニア・ワインのはじまりである、と言うことです。

もう一つ、ぶどう酒についてのお話をします。私は今年の7月、学会に参加するために、フランスのボルドーを訪れました。ボルドーは勿論ブルゴーニュと並んで、フランス・ワインの一大生産地であります。日本は良いお客さんで、当地の生産量の1/4から1/3くらいを輸入しているそうです。ワイン醸造所を訪れるツアーにも参加しましたが、ワイン畑を見学すると、それぞれのぶどう棚ごとに棚の手前に赤いバラが植えてありました。これは何のために植えてあると

思いますか？

答えは、「人が鉾山の中に入ってゆく時に、カナリアをかごに入れて持っていくのと、同じ理屈」です。つまり、カナリアが有毒なガスに敏感に反応して危険を教えてくれるように、バラもぶどうに悪い病原菌に速やかに反応して教えてくれる、と言うことでした。悪い病原菌に汚染されないうように、大事に、大事に農夫たちがぶどうを守っていることが実感できました。

さて、本日読みました2箇所目のヨハネ福音書を見てみましょう。1節には「私はまことのぶどうの木、私の父は農夫である」、5節には「あなたがたはその枝である」と書かれております。

すべての果実を結ぶ木がそうであるように、ぶどうの木はすべての栄養分、糖分を自分の根や茎に溜め込むのではなく、すべての大事な養分を一つ一つの枝に、ぶどうの房へと送ります。そして、農夫も悪い病原菌がつかないように、ぶどうの一枝、一枝を大切に見守っています。

聖書に書かれているこのたとえを言い換えると、ぶどうの木と同じようにイエス・キリストはぶどうの実となる私たちにすべてを犠牲にしてご自分を与えて下さり、神様もぶどう園の農夫のように温かく私たちを見守って下さる、と言うことを意味していると思います。

ぶどうが私たちの心を暖かく癒してくれ、と感じられた思い出が、私にはございます。私は子供の頃、有島武郎の「一房のぶどう」と言う童話を読みました。「友達の絵の具を盗んでしまっ

た主人公が、優しい先生に赦され、先生の白い手のひらにのせられた一房のぶどうが、主人公には決して忘れられない思い出になった」というお話です。この話はきつと皆さんもご存じではないか、と思います。

昨年春、江戸時代の高名な日本画家、「伊藤若冲」のコレクションを個人的に所蔵しているアメリカ在住のジョー&悦子Ⅱプライス夫妻が、「東日本大震災復興支援」記念として、宮城、岩手、福島県の3県で作品展を開催して、震災で傷ついた私たちの心を癒して下さった、という経験を持つことができました。

プライスさんが最初に出会った若冲の作品は、何と一色の墨で描かれた「葡萄図」でした。プライスさんの心の中に、聖書のこの箇所が思い出されたのか、どうか私は知りません。しかし、それまでまったく東洋の水墨画に興味を示さなかったプライスさんが、一枝のぶどうを描いた絵にひかれてコレクションを始め、それから50年たつてから、彼の集めた作品展が震災に苦しんだ東北の地で開かれたのです。ぶどうの絵がきっかけではじまったプライスさんの素晴らしい若冲コレクションは、ぶどうの甘い果汁が私たちの口の中いっぱいに広がるように、震災で傷ついた私たちの心を癒してくれたのです。本当にぶどうの持つまことに不思議な力、と言いますか、神様の導きを感じた次第です。祈ります。

「ただ一つ知っていること」

工学部准教授 長 島 慎 二

ヨハネによる福音書九章二十四節～三十四節

24 「さて、ユダヤ人たちは、盲人であった人をもう一度呼び出して言った。『神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知っているのだ。』²⁵彼は答えた。『あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知っているのは、目の見えなかつたわたしが、今は見えるということですよ。』²⁶すると、彼らは言った。『あの者はお前にどんなことをしたのか。お前の目をどうやって開けたのか。』²⁷彼は答えた。『もうお話ししたのに、聞いてくださいませんか。』²⁸そこで、彼らはののしって言った。『お前がたもあの方の弟子になりましたのですか。』²⁹我々は、神がモーセに語られたことは知っているが、あの者がどこから来たのかは知らない。』³⁰彼は答えて言った。『あの者がどこから来られたか、あなたがたがご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目

を開けてくださったのに。³¹神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。³²生まれつき目が見えなかつた者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。³³あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかつたはずです。』³⁴彼らは、『お前は全く罪の中に生まれたのに、我々に教えようというのか』と言い返し、彼を外に追い出した。』

今、読みました聖書の箇所には二種類の人物が登場します。一人はイエス様に眼を開けていた盲眼の盲人であり。もう一方は、その男を尋問するファリサイ派の人々です。

この盲人が眼を開けていただいた子細については、今読みました聖書の箇所の直前に記してあります。生まれつき眼が見えなかつたこの男について、弟子たちが、「ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも、両親ですか。」と問うたのに対して、イエス様は「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである。」と言って、眼を癒されたのでした。

この出来事はエルサレムで起こりましたので、評判になったのでしよう。しかも、安息日にイエス様が眼を癒されたというので、人々はこの男をファリサイ派の人々のもとに連れていき、先程読みましたような尋問がなされたのでした。

実は、既にファリサイ派の人々は、一度、この男を尋問したのですが、どうしても盲人であつたと信じてゐることができなかつた。そこで、改めてこの男を呼びだして尋ねたのです。「神の前で正直に答えなさい。わたしたちは、あの者が罪ある人間だと知つてゐるのだ。」と。男はしかし答えました。「あの方が罪人かどうか、わたしには分かりません。ただ一つ知つてゐるのは、目の見えなかつたわたしが、今は見えるということですよ。」

この箇所は、多くのことをわたしたちに教えてくれます。盲人であつたこの男は、実に正直に答えています。目の見えなかつた自分がいまは見える、それは彼自身の体験であり、彼にとつては、いささかもごまかすことができない事実であつたのです。わたしはクリスチャンでありますから、聖書に関して幾らかの知識はありますが、それでもほんの一部についてしか知らないと言つてよいことです。しかし、わたしには体験に基づいて、いささかもごまかすことが出来ないこと、知つてゐることがあります。それは主キリストがわたしにかけて下さつた愛であり恵みです。キリスト者は、ひとりひとりが、この箇所に登場する、盲人であつた男のように、確かに身に覚えのあ

るイエス様との出会いがあるものです。難しいことは解らなくとも、キリストが自分になにをして下さったかについては知っているものです。ですから、わたしも多くの人の前で自らの証しをすることが出来る。それは喜びであり誇りであることなのです。一方で、この箇所に登場するファリサイ派の人々は何と矛盾に満ちていることでしょうか。多くの証言を聞いても、直接本人に聞いたとしても、事実を事実として受け入れることができない人々。前に盲人であった男を尋問することはしても、直接イエス様に聞くことをしない人々。会堂を追放するという強権をもって男を追いつめようとする人々。ある意味では、これもわたしたちの姿であると言ってよいことでしょう。

この男は、目の見えなかった男ですから、この世的には無力で、差別され、その日一日を生きるのにも大変であったでしょう、実際、イエス様一行が道を進んでいたときに出会ったのは、この男が道端で物乞いをしていたからでしょう。人々に差別を受けながらも、衆目の集まる場所に身を置くしかなかった男なのです。おそらく、人々は物乞いの際に発する声しか聞いたことがなかったかもしれません。何かについて、この男と語り合うことはなかったでしょうし、この男が何かを主張することはなかったのではないのでしょうか。いまは、ファリサイ派の人々からの詰問を受け、実際に今後の生活上、いや命に関わるかもしれない圧迫を前にして、この男は勇気をもつ

て敢然と言いつたのでした。

「あの方がどこから来られたか、あなたがたがご存じないとは、実に不思議です。あの方は、わたしの目を開けてくださったのに。神は罪人の言うことはお聞きにならないと、わたしたちは承知しています。しかし、神をあがめ、その御心を行う人の言うことは、お聞きになります。生まれつき目が見えなかった者の目を開けた人がいるということなど、これまで一度も聞いたことがありません。あの方が神のもとから来られたのでなければ、何もおできにならなかつたはずです。」

わたしたちもまた、この男のように、敢然と主と自分についての証しをする者になりたいと思わずにはいられないことです。祈りましょう。

「ある日の音楽礼拝」

大学オルガニスト 今井 奈緒子

五月一九日（月）土樋キャンパスラーハウザー礼拝堂 司会…佐々木哲夫宗教部長

〔讚美歌〕 24番、541番

〔聖書箇所〕 詩編 五六編四〜五節

〔演奏曲目〕 J. S. バッハ (1685-1750) 「ラール編曲「ああ、われらとともに留まりたまえ、

主イエス・キリストよ」 BWV649 (前奏) J. C. フォーグラー (1696-1763) 「

ラール編曲「神よ、汝の慈しみによりて」(演奏) J. S. バッハ「ラール編曲「わ

れ、汝に別れを告げん」(後奏) BWV729

バッハは日曜毎の礼拝で用いるために器楽と声楽の様々な組み合わせによるひとまとまりの楽曲（のちに『教会カンタータ』と呼ばれます）を数多く残しました。多くはただ一度しか演奏さ

れることのない「機会作品」でしたから、バッハは自分でも良くできたと思われる6曲を、オルガンで（ひとりで）演奏できるよう編曲しました。これらは出版者の名をとってシュープラー・コーレル集とよばれています。その中の一曲「ああ、我らとともに…」は、弟子達が、夕暮れのエマオへの道で復活されたイエスに出会う美しい情景を、音楽で表現しています。

フォーグラールは若くして、生地に近いアルンシュタットとヴァイマルでバッハに学びました。弟子はこれをとて誇りにし、師も彼を最も優秀な弟子の一人と記しています。宮廷オルガニスト兼ヨハン・エルンスト・バッハ宮廷楽団のチェンバロ奏者でありながら、ヴァイマル市長にもなったという人物です。「神よ、汝の慈しみによりて」は十七世紀にドイツで生まれた賛美歌で「神よ、私たちを罪と悩みから救い出し、終わりの日までその御手のうちにおいてください」という内容の歌詞に、H. シャインが旋律をつけました。フォーグラールはこの旋律に四通りの編曲を施しています。最初はバッハがアルンシュタットで人々を驚かせた、前奏間奏入りの和声体コーレルに倣ったもの、二曲目は凝った装飾コーレル、第三、四曲はバッハにも影響を与えたG. ベーム風のトリオとビチニウム（二声部曲）です。

六月一日（水）泉キャンパス礼拝堂 司会：野村信 大学宗教主任

〔賛美歌〕 500番、542番

〔聖書箇所〕 ヨエル書 三章一〜五節

〔演奏曲目〕 J. S. バッハ (1675-1750) 「テール編曲「来たれ聖霊、主なる神」 BWV651 (前

奏) N.ド・グリニ (1672-1703) 組曲「来たれ、創造主なる聖霊よ」より「来たれ、

創造主」をテノールで・5声のフーガ・デュオ(演奏) J. S. バッハ コラールフア

ンタジー「来たれ聖霊、主なる神」 BWV652 (後奏)

六月八日の日曜日、全世界のキリスト教会ではペンテコステ(聖霊降臨日)を祝いました。「5」を意味する pentá から五旬節とも呼ばれ、この世に教会が生まれた「誕生日」を記念する日です。聖書は、聖霊が降る^{くだ}様子を「激しい風が吹いてくるような音」とともに「火のような舌が分かれ分かれに現れて弟子達ひとりひとりの上にとどまった」と伝えていきます。今日演奏する曲はいずれも、「聖霊よ来たれそして私たちの心を燃え立たせてくださいアレルヤ！」と歌う賛歌をもとに作られたオルガン作品です。聖霊は激しく降ることもあれば、時には静かに語りかけるように吹いてくることもある…同じコラール(ドイツ語の賛美歌)を元にした、同じくバッハの作品でありながら、前奏と後奏でこれほど雰囲気異なるのには、そんなわけがあります。前奏は静かに、

後奏は力強く、表現されているのです。

聖書朗読の後に、バッハと同時代、フランスはシャンパーニュ地方の中心地ランスのオルガニストであったニコラ・ド・グリニによるペンテコステの作品から演奏します。グリニは三十年余りの短い生涯に、オルガン・ミサ曲と5つの聖歌による組曲を「第1オルガン曲集」として出版しました。ここ泉キャンパス礼拝堂のオルガンは、これらフランス古典とよばれる作品を弾くのに最適な音色を持っています。三曲を通して、その独特な響きを聞いてみてください。

九月二四日(月) 土樋キャンパスラーハウザー記念礼拝堂 司会・佐々木哲夫宗教部長

〔賛美歌〕 28番、541番

〔聖書箇所〕 旧約聖書 詩編 百十九編九〜十六節

〔演奏曲目〕 J. L. クレープス(1713-80)「ラール編曲」心よりわれ、汝を愛しまつる、おお主よ」

(前奏) J. S. バッハ(1685-1750)「オルゲルビュヒライン」(オルガン小曲集)よ

り「主イエスキリストよ我らを顧みて」 BWV632 「最愛のイエスよ我らここに集

り」 BWV634 「これぞ聖なる十戒」 BWV635 「天にまします我らの父よ」 BWV636 (演

奏) J. S. バッハ「オルゲルビュヒラインより」ただ愛する神にのみ信頼する者は」

BWV647 (後奏)

オルゲルビュヒライン(オルガン小曲集)は、ヴァイマルの宮廷オルガニスト兼楽師長を務めていたバッハが、二十代の終わりから作曲を始めたコラール編曲集です。九二ページからなる自筆の楽譜帳に、待降節、クリスマス、新年、受難節、復活節というように、教会暦に従ってあらかじめ編曲しようとするコラールの題名が書き入れられています。儉約家であったバッハは紙とインクを節約したとみえて、作曲した頁には所狭しと音符が書かれています。全体の約三分の二にあたるページは、空白のまま残されています。どの曲も簡潔で、短く切り詰められた様式で書かれ、しかしその編曲方法の多様さにはまったく驚かされます。「就活人生」を送ったバッハは、この曲集をハレの聖マリア教会オルガニストに応募するための業績として用いようとしたが、賃金交渉が上手く行かず、結果的にケーテンへ行くことになりました。ケーテンではこの楽譜帳に「ここには初歩のオルガニストが、コラール(ドイツ語の賛美歌)をさまざまな形で展開するための手引き、さらにペダル演奏を習得するための手引きがある。いと高きところに栄光あれ。隣人が当曲集より学べるように。」との前書きを加えています。実際にこの曲集で学んだのは長男フリーデマンや、集まり始めた弟子達でした。前奏で弾くクレープスはバッハの愛弟子ですから、きつ

と彼もこの曲集で勉強したことでしょう。《オルゲルビュヒライン》は今日もオルガニスト達が礼拝に用いるために愛好し、またオルガン奏法を学ぶ人々たちには格好の教材として、弾き続けられています。

十一月十二日(水) 土樋キャンパスラーハウザー記念礼拝堂 司会・野村信 大学宗教主任

〔讀美歌〕 1番、541番

〔聖書箇所〕 旧約聖書 詩編 九八編四〜六節

〔演奏曲目〕 J. S. バッハ (1685-1750) オルゲルビュヒライン(オルガン小曲集) より「平

安と喜びもてわれは逝く」 BWV616 「主なる神よ、いざ天の扉を開きたまえ」
BWV617(前奏) 同「お人よ、汝の罪の大いなるを嘆け」 BWV622(演奏) 同「主
イエス・キリストよ、我ら汝に感謝す」 BWV623(後奏)

コラール旋律が、ありとあらゆる仕方で見事に編曲されていて、短い曲の中にエッセンスがぎゅっと詰まったオルゲルビュヒライン(オルガン小曲集)から、今朝は幾つかの作品を演奏します。前奏は永眠者を記念する十一月にちなみ、老シメオンの旅立ちを歌ったコラールと、天国

を希求するコラールの編曲を選びました。「いざ天の扉を開きたまえ」のペダル音型は、天国の扉をノックする象徴と言われます。「おお人よ、…」は曲集の中で唯一、6分を越える長さを持つ味わい深い名作。後奏はキリストの受難に際し、人類への救いの確信を歌う力強い曲です。

一二月十日（金）多賀城キャンパス礼拝堂 司会：佐々木哲夫宗教部長

〔讚美歌〕 121番、541番

〔聖書箇所〕 詩編 九八編四〜六節

〔演奏曲目〕 J. S. バッハ (1685-1750) コラール編曲「今こそ来ませ、異邦人の救い主よ」

BWV639 (前奏) F. H. A. ギルマン (1837-1911) 2つのノエルによるオッフエル

トワール (演奏) J. S. バッハ オルゲルビュヒラインより「キリストをわれ

らさやけく頌め讃うべし」BWV611 (後奏)

フランスで活躍したギルマンは、ほぼ独学でオルガン奏法をマスターしたといわれています。当時、カヴァイエールコルという名工が、楽器の音色を模倣し、まるで一台でオーケストラの様に機能するオルガンを製作しており、これらがギルマンの創作と演奏活動の原動力となりました。

C・M: ヴィドールとともに確立させたフランス独自の「オルガン交響曲」様式や、この作品のよ
うに、人々に親しまれている旋律を元にした編曲によって、パリ市民のみならずヨーロッパ各国、
ロシア、そしてアメリカやカナダでも聴衆を熱狂させたそうです。一八七一年にはパリのトリニ
テ教会オルガニストとなり、教育者としてもスコラ・カントールムの設立、パリ音楽院でヴィドー
ルの後継を務めるなど優れた業績を残しています。この作品は、クリスマスになると教会や学校
や家庭からも聞こえてくる、よく知られた2つの旋律をモチーフに展開します。

「聖書に見る偉い人とはどういう人か？」

教養学部准教授 大澤 史 伸

マタイによる福音書一八章一節～五節

「そのとき、弟子たちがイエスのところに来て、「いったいだれが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」と言った。²そこで、イエスは一人の子供を呼び寄せ、彼らの中に立たせて、³言われた。「はっきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにしなければ、決して天の国に入ることはできない。⁴自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。⁵わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」

みなさん、こんにちは。私は、教養学部地域構想学科の教員で大澤史伸と言います。大学では、「社会福祉論」、「福祉サービス論」等を教えています。

夏休みに、私は、韓国と長崎県に行ってきました。行ってみて分かったことですが、韓国と長崎はとてもよく似ていることが分かりました。それは、キリスト教会が多いということです。韓国は主にプロテスタント、長崎はカトリック教会が多いです。いずれも素晴らしい教会堂があります。しかし、韓国、長崎ともキリスト教が広がるまでは本当に厳しい戦いがあったのです。

韓国は、日本軍による迫害、長崎は、豊臣秀吉から徳川幕府、そして、明治の初めまで当時の支配者たちから迫害を受け、多くのクリスチャンが殺されています。しかし、それでもキリスト教はなくなることなく、広がっていった理由は何でしょうか？それは、今日のテーマでもありますが、「聖書に見ることのできる多くの偉い人」の存在によってキリスト教が広がっていったのです。今日は、聖書に見る偉い人とはどういう人かということについて共に学んでいきたいと思います。

聖書に見る偉い人とは、第一に、謙遜であることです。マタイによる福音書一八章一節から五節までをお読みします。そのとき、弟子たちがイエスのところに来て、「いつたいだが、天の国でいちばんえらいのでしょうか」と言った。そこで、イエスは一人の子供を呼び寄せ、彼らの中に立たせて、言われた。「はっきり言っておく。心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる者は、わたしを受け入れる

のである。」とあります。

イエス様は、子供のようになること」が大切であると言っているのです。「子供のようになる」とはどういうことでしょうか？一八章四節では、「自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。」とあります。「自分を低くする」つまり、謙遜になることです。

弟子たちの「天の国で一番偉いのはどういう人か？」という質問に対して、イエスは、自分の地位やお金では天国に入ることはできないこと、当時のユダヤ社会で子供が置かれていた無力で無価値な者という立場に身を置くものに天の国は与えられるということ、そして、謙遜な人は、無価値に見える者をも積極的に受け入れる生き方をする人であることを私たちに教えているのです。

第二に、人をつまずかせないことです。一八章六節、で、「しかし、わたしを信じるこれらの小さな者の一人をつまずかせせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、深い海に沈められる方がましである。世は人をつまずかせるから不幸だ。つまずきは避けられない。だが、つまずきをもたらす者は不幸である」とあります。

ここから分かることは、私たちが人生でつまずくことは避けられないとあります。私たちは病気に悩むし、怪我もします。そして、最後には死んでしまうのです。しかし、大切なことは、今、私たちがしているように、聖書の言葉に耳を傾け、心の中で祈ることです。一言で言うならば、

神様を計算に入れた人生を送るということになります。どんな人でもつまずくことはありません。しかし、そのような場合には、また、新しい第一歩を踏み出せばよいのです。イエスはここで私たちにつまずいてもいいんだということを言っているのです。

しかし、人をつまずかせることはいけないと、かなり厳しい言葉で言っていることが分かります。もう一度、七節をお読みします。「世は人をつまずかせるから不幸だ。つまずきは避けられない。だが、つまずきをもたらす者は不幸である。」と言っています。さらに続けて、八節では、「もし片方の手があなたをつまずかせるなら、それを切つて捨ててしまいなさい。両手両足がそろつたまま永遠の火に投げ込まれるよりは、片手片足になつても命にあずかる方がよい。」とあります。いずれにしましても、人をつまずかせない配慮をすることが必要であるということは間違いがありません。

第三に、一人を大切にすることです。一八章十節からは有名な「迷い出た羊」のたとえ話が出てきます。12節でこうあります。「あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持つていて、その一匹が迷い出たとすれば、九九匹を山に残しておいて、迷い出た1匹を捜しに行かないだろうか。」これは、イエス様から私たちへの質問です。考えてみると、99匹の羊飼いに従つたある意味「まともな羊」をないがしろにして、羊飼いに従わなかつた「まともでない羊」一匹のために、自分

の時間と労力を使うでしょうか？

私の場合で言うならば、大澤ゼミは学生が十名いますので、こういうことになります。私の言うことを良く聞く優秀な生徒九人を残して、私の言うことを聞かないで好き勝手なことばかりしている生徒一人のために私の持っている時間と能力を使うということです。こう考えると、すぐには「はい」とは言えません。多分、イエス様に聞かれたら、私はすぐには答えられないと言って、即答を避けると思います。

私は大学教員になる前に、知的障害の子供の施設で仕事をしていましたが、彼らは知的障害という枠の中で一緒なのではなくて、一人ひとりみんな違い、本当に個性的な魅力のある子供たちでした。一人を大切にすることが大切だということは聖書の中から学ぶことができますが、社会福祉や医療、教育現場でも学ぶことができます。

最後にこんな話をして終わりたいと思います。私に影響を一番与えた人と言えば、小学校五年生の時の担任の栗田とし子先生です。私は、小学校一年生の時に両親が離婚をして、母親と二人で東京江戸川区小岩の風呂なし、共同トイレの四畳半一間に住んでいました。いつも一人で母親が帰ってくるのをアパートでポツンと待っていました。勉強は全くやらずにクラスで下から数えた方が早いような成績でした。不思議なもので全く勉強をしなかったのですが、ビリではありま

せんでした。だから、まだ自分より下がいると安心してますます勉強をしなくなつたのです。

小学校一年生から四年生までの担任の先生は私のことを馬鹿にしていました。そのことは親子面談で母親が泣いていたことから分かりました。でも、栗田先生は違いました。私のことを良くほめてくれました。絵を描くとみんなの前でほめてくれ、ソフトボールでヒットを打つと飛び上がって喜んでくれました。もちろん、良く怒られもしました。でも、起こる前に栗田先生は私に聞いてくれました。「大澤君のやったことは正しいと思う？」もちろん、正しくないことは分かつてやっていたので、「ううん」と言うと、思いつきり叩かれました。

栗田先生は、聖書を読んだことがあるのかどうかは分かりませんが、今日の聖書で言うところの「偉い人」だと思えます。それは、私がどんなくだらなことを質問しても馬鹿にしたりせず、きちんと答えてくれるような謙遜な人であったこと、私をつまずかせることがなかったこと、ひよつとすると私が、今、大学教員をしているのは栗田先生の影響かもしれませぬ、そして、クラスからはみ出た私という一人を大切にしてくれたこと、です。

私たちもまた、今日の聖書にあるように、謙遜であること、人をつまずかせることがないこと、一人を大切にするような日々の生活を送りたいものです。あなたのために祈りをいたします。

brethren in need keep asking us for help, and we have to be thankful for being able to offer our help.

Illustration taken from the homepage of the Lutheran Church at Breitenbrunn in Germany

(<http://kirche-breitenbrunn.de/geschichte/450-jahre/christustrager>)



confident that the job of carrying a child is not difficult at all. He certainly has carried much heavier people. But this time, when he starts crossing the river with the small load on his shoulders, he almost loses his power. Why? It is a double load: not only the child, but also the responsibility for a safe future (symbolized by the ball=world in the child's right hand). Any political leader will tell you, how tough it is to make decisions for a whole nation. By himself he will not be able to achieve a positive result. He depends on strong support from others. Christians know that helping people in need can be simple and a matter of routine. But realizing that it is impossible to do away with human suffering may change our attitude: from confidence to despair, from strength to weakness. And that is the point: If we rely on our own strength, we may stumble or even break down. Trying to follow the teachings given by Christ may cause harm to us, unless we realize that we need spiritual support to carry on and on and on.

Going back to the illustration: Of course we see the strong man with the young child on his back. But we should look behind the apparent picture. Isn't it the child that is carrying the man? That does sound paradoxical, doesn't it?

For me this is a Christian message: With the help from above we can shoulder the most difficult - and the seemingly very easy - job. No matter how light or heavy, our own strength is not enough. We should humbly ask for help from God. Our

from my life, when I had finished Senior High School and was working in the USA. I was doing some kind of social work: collecting, sorting and then shipping used clothing to places which had experienced natural disasters. These people had lost everything and were in need of basic support. While we were checking the donations given to us there was always a radio playing in the warehouse. And one day I heard the song "He ain't heavy, he's my brother." Maybe it was the original version by the pop group "The Hollies", or maybe it was the cover version by Neil Diamond. Instantly there was a connection in my mind about the hit song and the legend of St. Christopher. It made a big impression on me and if you are interested in soft rock music, you may find this song through the internet. They put the words of Paul to a group of people in central Turkey into a new context - not plain Christian, but rather humanitarian. And these words add something worth thinking about. Not just a fuzzy slogan like "Yes, we can!"

Later in life I saw many pictures of boys or girls carrying a not so little brother or sister on their back. Mostly these kids looked poor, but they had a smile on their face. The respective photographer may want to remind us of the message taught to Christopher.

Thinking again about the original story concerning Christopher a paradox started puzzling me: The strong man must be

One day a small child called on him. Dutifully the big man put the child on his shoulders and started to step into the water. Little by little the boy's weight seemed to become heavier and heavier. Christopher now thought that he could not reach the other side of the river. He made it, barely, and told the child that it felt like he had been carrying the whole world on his shoulders. To this the child replied: "As a matter of fact, you have done just that. I am Jesus Christ and I carry the whole world, so you carried me and the whole world at the same time." From that time on he used the name "Christopher" which in the Greek language has the meaning "Christ-bearer". Because he did not want to give up his Christian faith he was killed and became a martyr, a saint by Christian standards.

Legends and fairytales often try to put an important message into a simple story so everyone can easily understand its meaning or even several meanings. What could be the message of this legend? The most simple explanation is using the image of St. Christopher as a lucky charm. This is what you can see in key holders bearing his image. Travelers use it to ensure safe passage during a dangerous trip.

Maybe I should start my own explanation with an episode

The load on our shoulders

教養学部教授 Frieder Sondermann

(ゾンダーマン フリーダー)

Have you ever heard the legend about a man named Saint Christopher? I want to present some information regarding him and tell you how this story is connected to the text from the Bible (**Paul's letter to the Galatians 6:1-5**). We do not know much about Christopher as far as historical facts are concerned. He may have lived more than 1700 years ago in what is now northern Africa and may have died in southern Turkey.

But there are several stories which describe how this very strong and proud man (initially named Reprobus) only wanted to serve the mightiest person on earth. He rejected a king, then the devil, and finally found out through the teaching of a hermit that Jesus Christ was the strongest; and the best way to serve Christ was to carry people across a dangerous river. So this is what this big man did from now on.

「ステンドグラスに描かれたキリスト」

総務部長 日野 哲

ルカによる福音書 第二四章五〇節～五一節

50 イエスは、そこから彼らかれをベタニアの辺りあたまで連れて行き、手を上げて祝福しゅくふくされた。
51 そして、祝福しゅくふくしながら彼らかれを離れ、天てんに上げられた。

パイプオルガンの荘厳な音色に導かれてこの礼拝堂に入り、席に座って見上げると、正面のステンドグラスが目に入ります。

このステンドグラスは、言うまでもなく、イエス・キリストが十字架の死から復活し、十一人の弟子たちに最後の祝福を与えながら昇天する情景を描いたものです。

皆さんもご存知の泉キャンパス礼拝堂の正面にも大きなステンドグラスがあり、イエス・キリストの十字架と復活、そして昇天の三つの場面が描かれています。この土樋の礼拝堂のステン

ドグラスとの違いの一つは、十字架の傷跡がどこに印されているか、というところです。泉キャンパスのステンドグラスでは、復活したキリストの両手と両足、そして十字架上で兵士の槍で突き刺されたわき腹の合計5箇所には赤いガラスが配色されていました。その上にある昇天の場面には赤は使われていませんでした。この土樋キャンパスのステンドグラスはどうでしょうか。

皆さんのところからははつきりとは見えなと思います。昇天するイエス・キリストの手と足に十字架に釘付けられた真っ赤な傷跡が描かれています。これは、製作された方の意図、あるいは信仰によっても異なるとは思いますが、私は、イエス・キリストがその傷跡を手と足に残されたまま、天の父なる神のもとに昇られた、ということには、とても大切な意味が込められていると思います。

皆さんは、礼拝でよくこんな言葉を聴かれると思います。「イエス・キリストは、私たちの罪の身代わりとして十字架に付けられた。」という言葉です。そして、「そのことによって、私たちは相変わらず罪を犯し続ける存在でありながら、罪のない者とみなされる。」という言葉が語られます。

イエス・キリストが十字架に付けられた証拠は何でしょうか。それは、その手と足に残されている釘の傷跡です。やがて、私たちも死んで天に上げられ、神様の前に立たされると聖書は告げ

ています。私たちのすべてを知っておられる方の前で申し開きをしなければならぬとも恐ろしい瞬間です。しかし、イエス・キリストはその手と足の傷跡を神様に見せながら、こう言われるのです。「私はこの人の罪の身代わりとして十字架に付けられました。その証拠はこれです。ですから、この人にはもう罪はありません。この人は既に清い者とされています。」これこそ、私たちの希望の源であり、慰めではないでしょうか。

ステンドグラスの下の方に注目してください。何やら文字が刻まれています。そこに刻まれているのは、英語による聖書の言葉で、先ほどお読みした聖書の箇所の後半の部分です。即ち、彼は「祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。」という言葉です。私は、この言葉を読み、そして手を挙げて弟子たちを祝福しておられるイエス・キリストを見上げると、とても嬉しくなり、慰めを受けたように感じます。それは、この弟子たちと同じように、キリストは今でも私たちを祝福してくださっているのを見ることが出来るからです。では、私たちには祝福していただけるような資格が本当にあるのでしょうか。

これについて、聖書は次のように語ります。「私の目にあなたは高価で尊い。私はあなたを愛している。」また、次のようにも書かれています、「私は、あなたのために立てた計画をよく心に留めている。それは平和の計画であって、災いの計画ではない。将来と希望を与えるものである。」

いずれも旧約聖書の言葉ですが、つまり、神様の目から見ると、私たちは価値のある存在であり、神様は私たちのために立てた将来と希望を与える計画をいつも心に留めておられる、ということ
です。

このステンドグラスは、長い困難な時代を経て、多くの危険にさらされながら、今日まで大切に守られてきました。礼拝堂が完成したのは昭和七年（一九三二年）、もちろんこのイギリス製のステンドグラスも同時に設置されていますので、既に八十年以上が経過しています。

この間、完成して間もなく始まった第二次世界大戦当時は、ステンドグラスが当時の世相からするとあまりにも色鮮やか過ぎるという理由から板で覆われ、白い布が張られ、その上に日章旗（日の丸）が掲げられました。そして、昭和二十年七月の仙台空襲では、東北学院の主な施設がほとんど焼けてしまう中、幸いこの礼拝堂とステンドグラスは破壊からまぬがれました。

その後も、昭和四十年代の学園紛争で花瓶や投石が飛び交う中も、また昭和五十三年の宮城県沖地震でも、そしてあの三年前の東日本大震災でも、不思議と守られてきたのです。

そして、今年（二〇一四年）十二月十九日、この礼拝堂は、キャンパス正面の本館と左の旧図書館と共に、国の登録有形文化財に登録されました。

皆さんは、在学中、礼拝のたびごとに是非このステンドグラスを見上げていただきたいと思

ます。そして、卒業後は、ぜひこれを思い出し出してください。

先ほど私たちは繰り返し歌いました、「天の力に癒し得ぬ悲しみは、地にあらじ」（讚美歌三九九番）。即ち「天の神様の力で、癒すことのできない悲しみなど、この地上には一切ない」という賛美であり、告白です。

私たちを価値のある存在として認め、私たちに将来と希望を与える計画をお立てになり、いつも祝福をもって私たちを導き、慰めを与えておられるお方を、どんな時も思い起こしていただきたいと思えます。

編集後記

大学宗科主任 原田浩司

東北学院大学では、前・後期合わせ三十週の講義期間中、土樋、泉、多賀城の三つのキャンパスで、月曜日から土曜日まで毎日、第一時限目と二時限目を挟む時間帯に大学礼拝が行われています。また、大学の三つの寄宿舎でも、週に一度、夕礼拝が行われています。通常の御言葉の説教による礼拝以外にも、音楽礼拝や英語礼拝なども行われています。この説教集は、本学におけるそうした様々な、また数多くの礼拝の機会に語られた説教を編集したものです。ここに『大学礼拝説教集』第十九号を皆様にお届けできることを心から喜び、そして、説教原稿を寄稿していただいたお一人おひとりに感謝いたします。

今回の表紙は、東北学院の院長室に飾られている絵画「われらが学舎、東北学院」です。わたしは今回はじめてこの絵を見ましたが、おそらく多くの方もそうかもしれませぬ。この絵を描かれた東北学院中・高の元美術教師の小山喜三郎様から、この絵の制作とその背景について書いてくださった文章が寄せられていますので、ここにご紹介いたします。

「われらが学舎、東北学院」について

私は昭和三十三年から三十九年まで、中高の美術教師であった。今、当時を回想し感慨しきりである。

ジープというニックネームの月浦校長先生は、縦横無尽の活躍で信望を集めておられ、先生方も多士済済の英才揃いであった。生徒達は純真で愉快で、いかにも高校生らしいスクー
ルライフを楽しんでいた。教育の原点が明示されていたように思う。薔薇色の青春の一刻を
すごさせていただいた。感謝で一杯である。

○制作にあたって

南町大火で消失し再建された時代から現代まで、東二番丁の都市計画道路拡張で一部とり
壊され、本年春に新校舎移転で姿を消した往年の威容を大切にしたい。時代考証の資料を集め、
美術部員だった教え子の意見や記憶を参考にさせていただき、構想を練った。

○制作意図

外国の多くの信者の善意によって完成され、戦時中の苦難を乗り越えて、卒業生の想い出
が凝縮した建物である。左右対称のゴシック式建築の勇姿を忠実に描く一方、学院の校地の
中で最も象徴的な「さいかちの木」（昭和三十四年老衰のため台風で倒木）を全盛期の樹勢で
再現し、校舎の脇役として強調した。又、学院の未来へ発展することを祈り、陽光と影を強
調する。空に豊旗雲を描き希望をあらわしている。

平成十七年九月十二日

小山喜三郎

この絵画の建物はあいにく現存していませんが、現存する土樋キャンパスの本館、礼拝堂、そして大学院棟が三位一体で、文化庁より登録有形文化財登録され、そのプレートも授与されました。本学の歴史と伝統の根幹にある「建学の精神」の証として、説教は昔も今もこれからも語り継がれていきます。

今年、あの東日本大震災発生直後に入学した学生たちが、今春卒業し、社会へ巣立っていきました。学生時代に本学で触れたキリスト教の福音が、これからの彼らの人生においてこそ豊かな実を結ぶことを願うと共に、本学が被災地に立つキリスト教大学としてこれからも礼拝をおして福音を証し、学生たちに真の希望と慰めを伝える働きができるよう、神の支えと導きを祈り願うばかりです。

大学礼拝説教集

第 十九 号

二〇一五年三月三十一日発行

発行責任者 宗教部長 佐々木哲夫

編集責任者 大学宗教主任 原田 浩司

出版 社 株式会社 アクトジャパン

問い合わせ先 東北学院大学 総務課

〒 980-8511 仙台市青葉区土樋 一の三の一

☎ 〇二二・二六四・六四二八